

令和7年（2025年）の霧島山の火山活動

福岡管区気象台
地域火山監視・警報センター
鹿児島地方気象台

えびの高原（硫黄山）周辺

硫黄山の南側の噴気地帯では、噴気活動が引き続き活発な状態で経過し、一部の噴気孔では、熱水の流出を時々確認しました。

硫黄山の西側500m付近の噴気地帯では、1月から2月にかけてごく弱い噴気を時々観測しましたが、3月以降噴気は認められませんでした。

GNSS 連続観測では、硫黄山近傍の基線において、2023年5月頃から硫黄山の山体浅部における膨張を示すと考えられるわずかな伸びがみられていましたが、同年11月頃から停滞しています。

硫黄山付近では、火山性地震は少ない状態で経過しました。硫黄山近傍の地震計では、9月から12月上旬にかけて、噴気活動に伴うとみられる震動の振幅の増減を断続的に確認しました。火山性微動は観測されませんでした。

えびの高原周辺（韓国岳～韓国岳北東側周辺及び大浪池周辺）では、火山性地震が時々発生しました。

繰り返し実施した現地調査及び上空からの観測では、硫黄山の南側の噴気地帯において地熱域の分布に特段の変化は認められませんでした。硫黄山の西側500m付近では、地熱域の消失を確認しました。

○噴火警報・予報及び噴火警戒レベルの状況、2025年の発表履歴

2025年中変更なし	噴火警戒レベル1（活火山であることに留意）
------------	-----------------------

この火山活動解説資料は気象庁ホームページでも閲覧することができます。

https://www.data.jma.go.jp/vois/data/report/monthly_v-act_doc/monthly_vact.php

本資料で用いる用語の解説については、「気象庁が噴火警報等で用いる用語集」を御覧ください。

<https://www.jma.go.jp/jma/kishou/known/kazan/kazanyougo/mokuji.html>

この資料は気象庁のほか、国土地理院、東京大学、九州大学、鹿児島大学、国立研究開発法人防災科学技術研究所、宮崎県及び鹿児島県のデータも利用して作成しています。

資料中の地図の作成に当たっては、国土地理院発行の『数値地図 50mメッシュ（標高）』、『電子地形図（タイル）』及び『基盤地図情報』を使用しています。

○2025 年の活動概況

・噴煙など表面現象の状況（図1～6、図7-①②）

硫黄山では、噴火は観測されませんでした。

硫黄山の南側の噴気地帯では、監視カメラや繰り返し実施した現地調査において活発な噴気活動や地熱域を確認しており、噴気の高さは 600m以下で経過しました。また、一部の噴気孔では、熱水の流出を時々確認しました。硫黄山の西側 500m付近の噴気地帯では、1月から2月にかけてごく弱い噴気を時々観測しましたが、3月以降噴気は認められませんでした。

繰り返し実施した現地調査では、硫黄山の南側の噴気地帯において活発な噴気活動が引き続き認められました。9月2日及び12月9日の観測では、噴気孔のごく近傍に泥が飛散し堆積していることを確認しました。9月2日の観測では、熱水の流出痕に対応した温度の高い領域を確認しました。硫黄山の火口南東側から南側斜面の一部では、地熱域のわずかな拡大が時々認められました。

繰り返し実施した韓国岳4合目からの現地調査では、硫黄山の火口南東側から南側斜面、南西側（旧韓国岳登山道脇、硫黄山南西観測点付近）で引き続き地熱域を確認しましたが、特段の変化は認められませんでした。また、硫黄山の西側 500m付近では、噴気及び地熱域は確認されませんでした。硫黄山の西側から南西側では、2024年頃から地熱域の衰退傾向が認められます。

12月12日に陸上自衛隊第8飛行隊の協力により実施した上空からの観測では、硫黄山の火口南東側から南側斜面、南西側において、2024年3月13日の観測に引き続き地熱域を確認しましたが、特段の変化は認められませんでした。硫黄山の西側 500m付近では、地熱域の消失を確認しました。

・地震や微動の発生状況（図7-③～⑥、図8）

硫黄山付近では、8月中旬から9月にかけて火山性地震の一時的な増加がみられましたが、期間を通して少ない状態で経過しました。硫黄山近傍の地震計では、9月から12月上旬にかけて、噴気活動に伴うとみられる震動の振幅の増減を断続的に確認しました。火山性微動は観測されませんでした。火山性地震の年回数は490回（2024年：543回）と少ない状態でした。震源は、硫黄山近傍の深さ0km付近に分布しました。

えびの高原周辺（韓国岳～韓国岳北東側周辺及び大浪池周辺）の火山性地震の年回数は705回（2024年：2,038回）でした。震源は、えびの高原周辺の広い範囲に分布しました。火山性微動は観測されませんでした。

・地殻変動の状況（図7-⑦、図9、図10）

GNSS 連続観測では、硫黄山近傍の基線において、2023年5月頃から硫黄山の山体浅部における膨張を示すと考えられるわずかな伸びがみられていましたが、同年11月頃から停滞しています。

・全磁力変化の状況（図11）

全磁力観測では、観測を開始した2016年2月以降、硫黄山の北側の観測点で全磁力の増加、南側の観測点で全磁力の減少といった、硫黄山周辺の地下での熱の高まりを示す変化が観測されています。



図1 霧島山（えびの高原（硫黄山）周辺） 硫黄山の状況（えびの高原監視カメラ）

- ・硫黄山の南側の噴気地帯では、噴気活動は活発な状態で経過し、噴気の高さは600m以下で経過しました。
- ・硫黄山の西側500m付近の噴気地帯（2018年4月26日の噴火場所周辺）では、1月から2月にかけてごく弱い噴気を時々観測しましたが、3月以降噴気は認められませんでした。



図2 霧島山（えびの高原（硫黄山）周辺） 硫黄山南側の状況（硫黄山南監視カメラ）

硫黄山の南側の噴気地帯では、活発な噴気活動が続いています。同噴気地帯では熱水の噴気孔外への流出（白破線内）を時々確認しました。



図3 霧島山（えびの高原（硫黄山）周辺） 図4～6の観測位置及び撮影方向

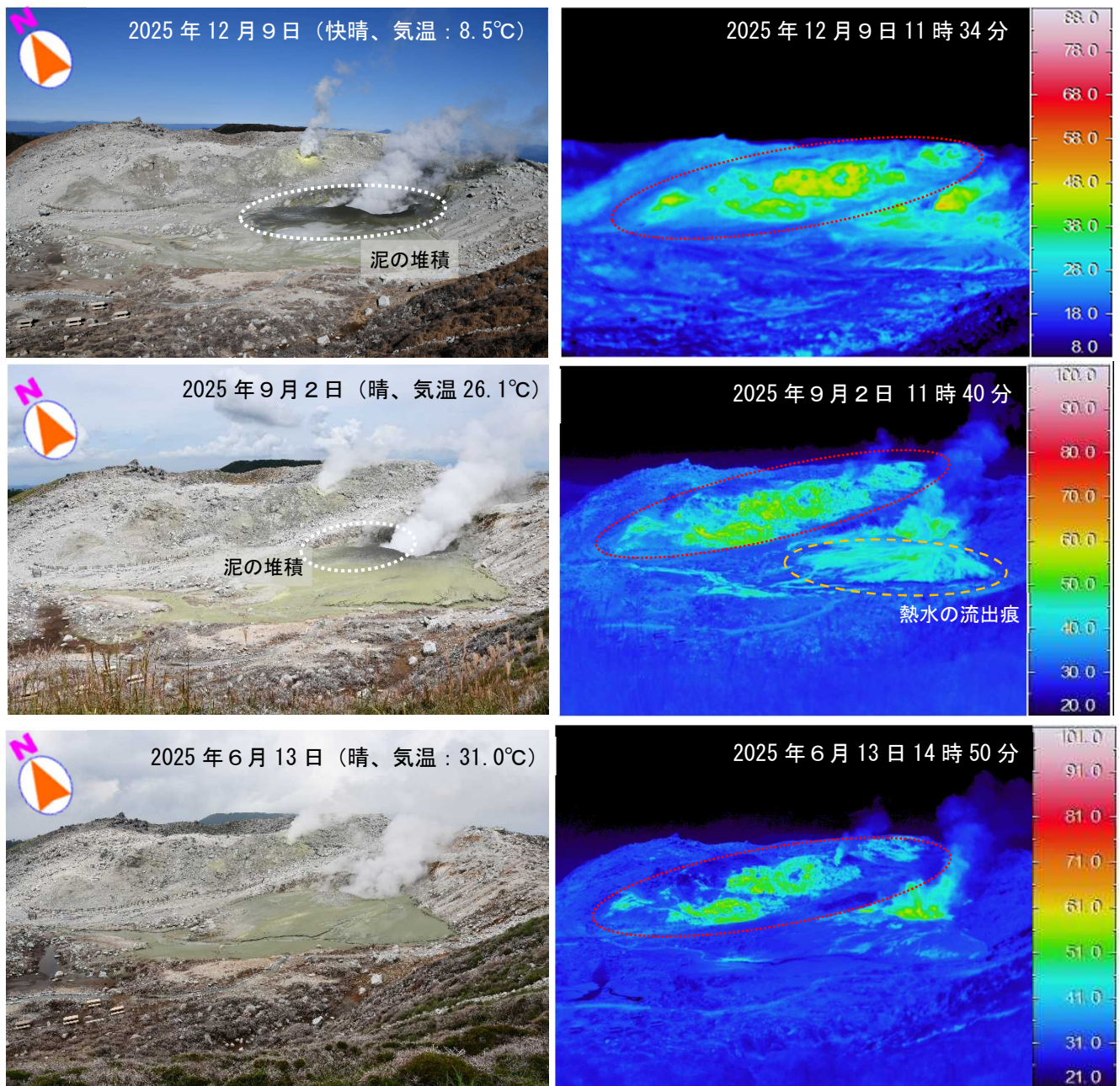


図4 霧島山（えびの高原（硫黄山）周辺） 硫黄山の南側の噴気及び地熱域の状況

（硫黄山南2全磁力観測点付近から観測）

- ・硫黄山の南側の噴気地帯では、活発な噴気活動が引き続き認められました。9月2日及び12月9日の観測では、噴気孔のごく近傍に泥が飛散し堆積していることを確認しました（白破線内）。また、9月2日の観測では、熱水の流出痕に対応した温度の高い領域を確認しました（橙破線内）。
- ・硫黄山の火口南東側から南側斜面の一部では、地熱域のわずかな拡大が時々認められました（赤破線内）。

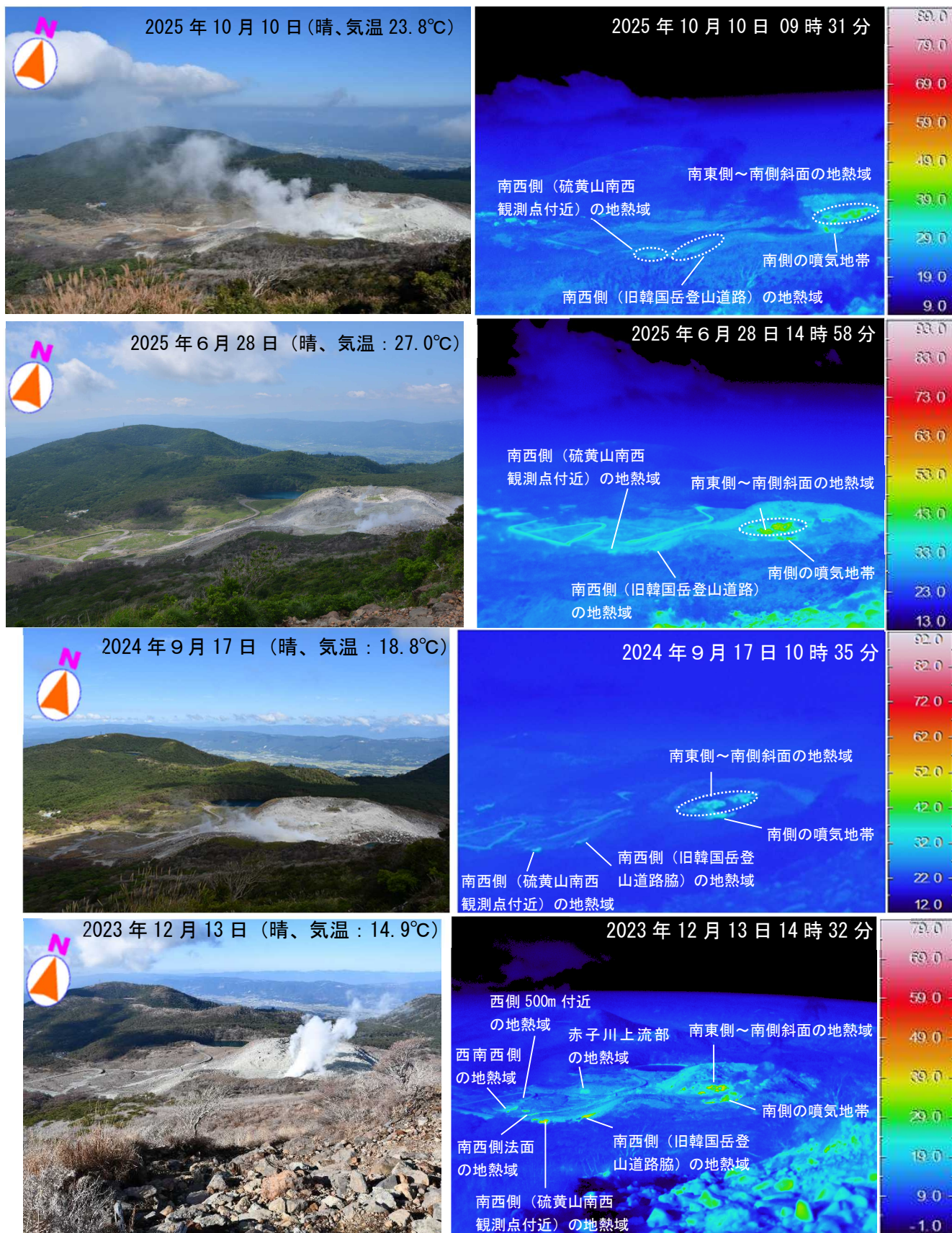


図5 霧島山（えびの高原（硫黄山）周辺 硫黄山の火口及びその周辺の状況

(韓国岳4合目付近から観測)

- ・硫黄山の火口南東側斜面から南側斜面、南西側（旧韓国岳登山道脇、硫黄山南西観測点付近）では、引き続き噴気及び地熱域を確認しました。
- ・硫黄山の西側500m付近（2018年4月26日の噴火場所）では、噴気及び地熱域は確認されませんでした。
- ・硫黄山の西側から南西側では、2024年頃から地熱域の衰退傾向が認められます。

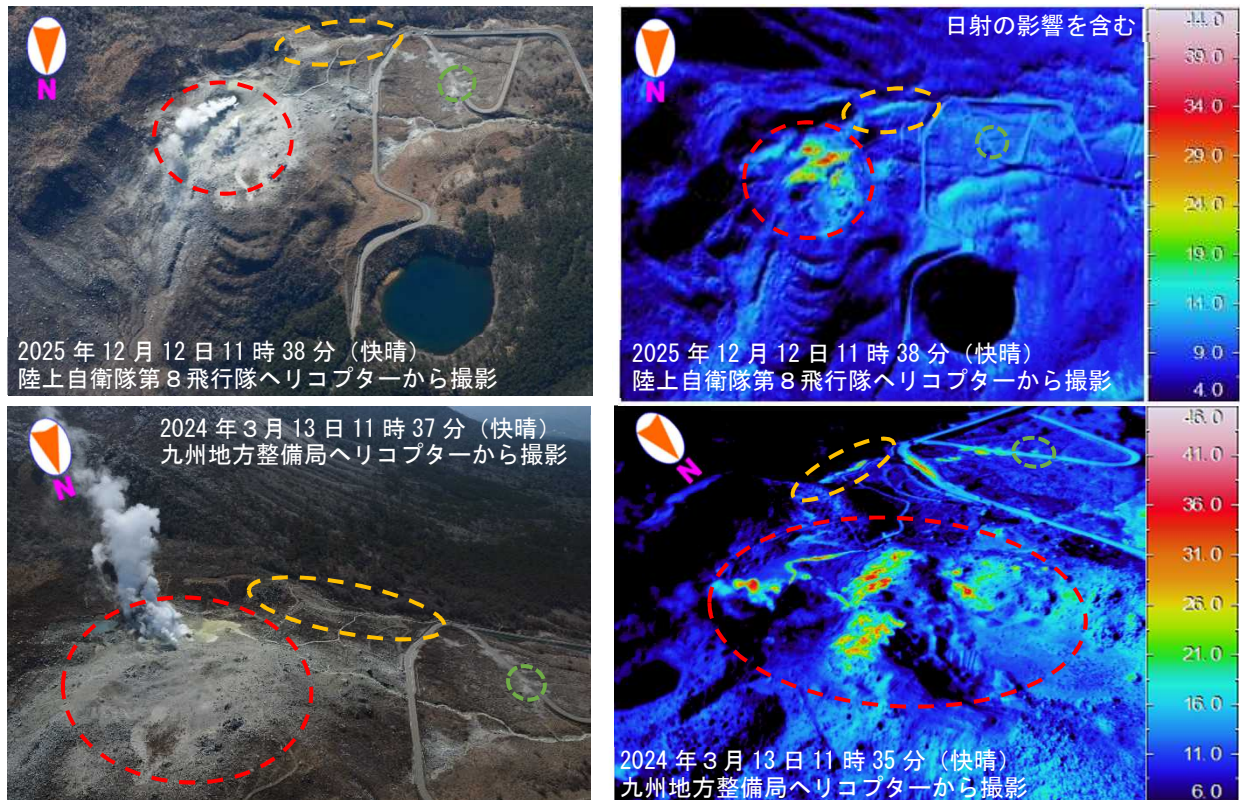
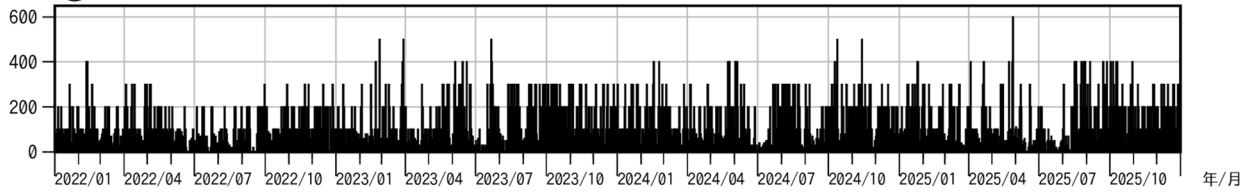


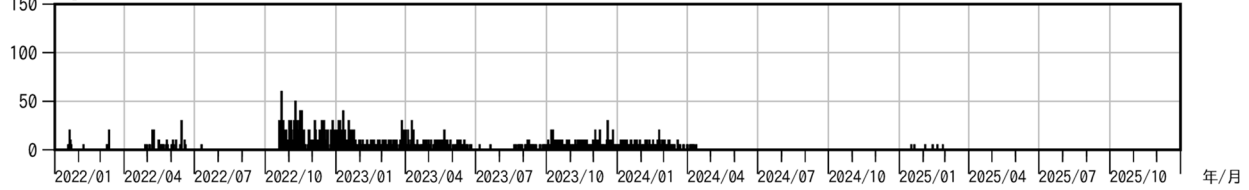
図 6 霧島山（えびの高原（硫黄山）周辺） 硫黄山及びその周辺の状況（上空から観測）

- ・ 12 月 12 日に陸上自衛隊第 8 飛行隊の協力により実施した上空からの観測では、硫黄山の火口南東側から南側斜面（赤破線内）及び硫黄山南西側（橙破線内）において、2024 年 3 月 13 日の観測に引き続き噴気及び地熱域を確認しましたが、噴気の状態や地熱域の分布に特段の変化は認められませんでした。
- ・ 硫黄山の西側 500m 付近（緑破線内、2018 年 4 月 26 日の噴火場所）では、地熱域の消失を確認しました。

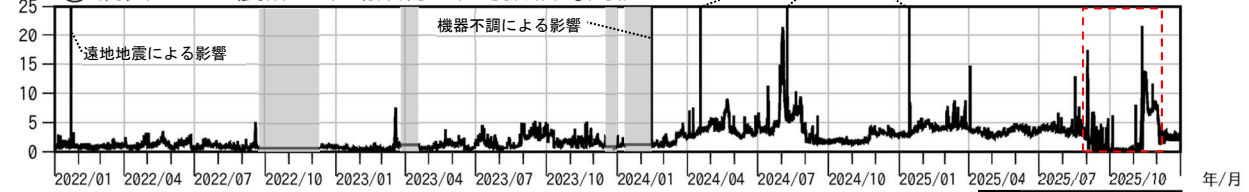
① 硫黄山付近の噴気の高さ（日最高）



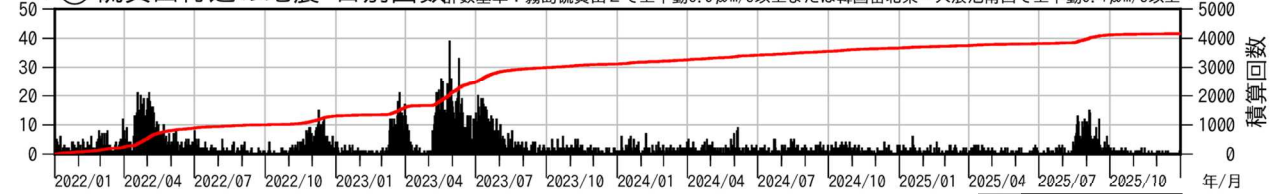
② 硫黄山の西側500m付近の噴気の高さ（日最高）



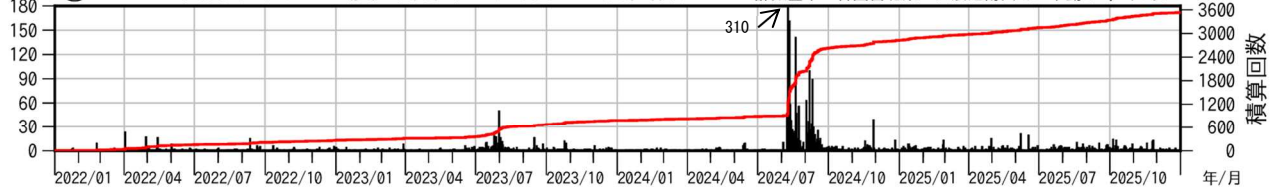
③ 硫黄山2地震計上下動成分 平均振幅時間値



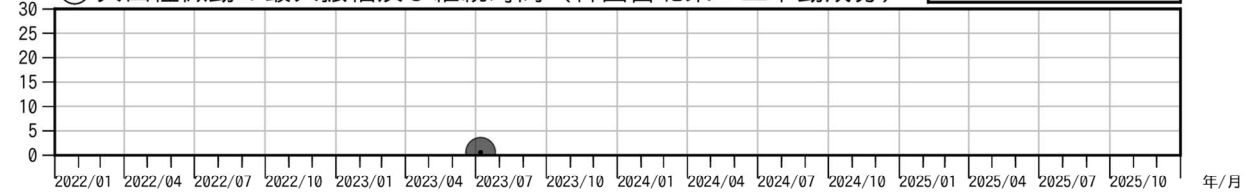
④ 硫黄山付近の地震 日別回数



⑤ えびの高原周辺の地震（硫黄山以外）日別回数



⑥ 火山性微動の最大振幅及び継続時間（韓国岳北東：上下動成分）



⑦ 硫黄山北西一硫黄山南西（基線長：377m）

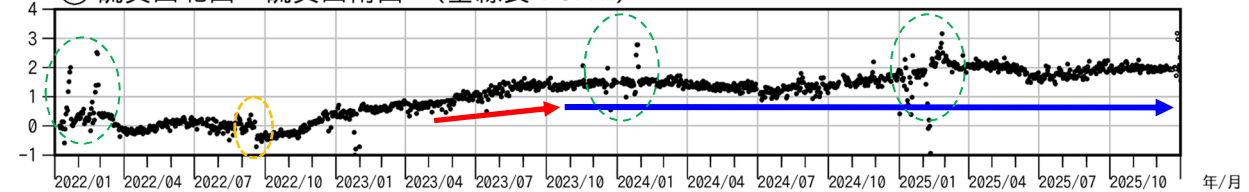


図7 (前ページ)

霧島山（えびの高原（硫黄山）周辺） 火山活動経過図（2022年1月～2025年12月）

<2025年の状況>

- ・硫黄山南側の噴気地帯では、噴気の高さは600m以下で経過しました。
- ・硫黄山の西側500m付近の噴気地帯では、1月から2月にかけてごく弱い噴気を時々観測しましたが、3月以降噴気は認められませんでした。
- ・硫黄山近傍の地震計では、9月から12月上旬にかけて、噴気活動に伴うとみられる震動の振幅の増減を断続的に確認しました（赤破線内）。
- ・硫黄山付近の火山性地震の年回数は490回（2024年：543回）と少ない状態でした。
- ・えびの高原周辺（韓国岳～韓国岳北東側周辺及び大浪池周辺）の火山性地震の年回数は705回（2024年：2,038回）でした。
- ・火山性微動は観測されませんでした。
- ・GNSS連続観測では、硫黄山近傍の基線において、2023年5月頃から硫黄山の山体浅部における膨張を示すと考えられるわずかな伸びがみられていました（赤矢印）が、同年11月頃から停滞しています（青矢印）。

⑦の基線は図10の②に対応しています。

基線の空白部分は欠測を示しています。

⑦の緑色の破線内の変化は、地面の凍上の影響と考えられます。

⑦の橙色の破線内の変化は、台風等の気象要因と考えられます。

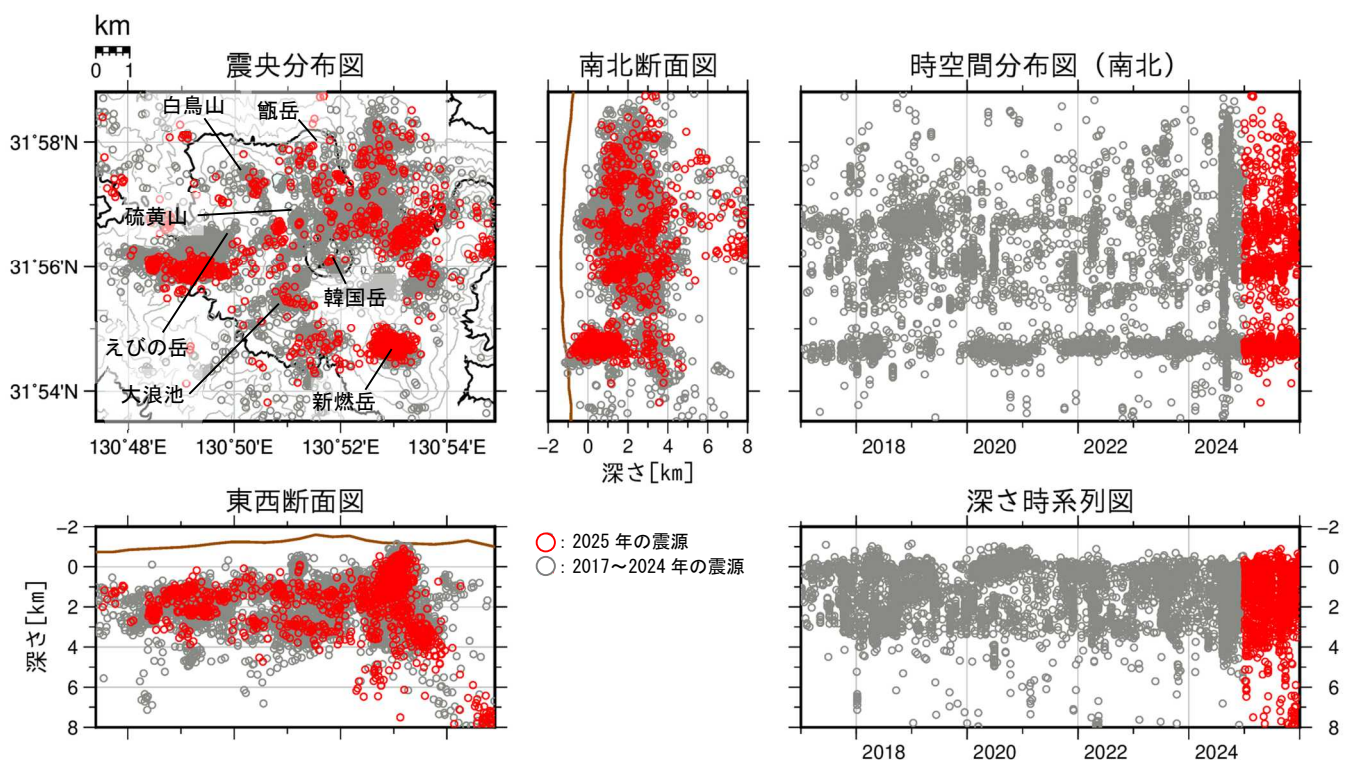


図8 霧島山（えびの高原（硫黄山）周辺） 震源分布図（2017年～2025年）

<2025年の状況>

震源は、硫黄山近傍の深さ0km付近及びえびの高原周辺の広い範囲に分布しました。

※2018年10月は、観測点の障害により、硫黄山近傍で震源が求まらなかった期間があります。

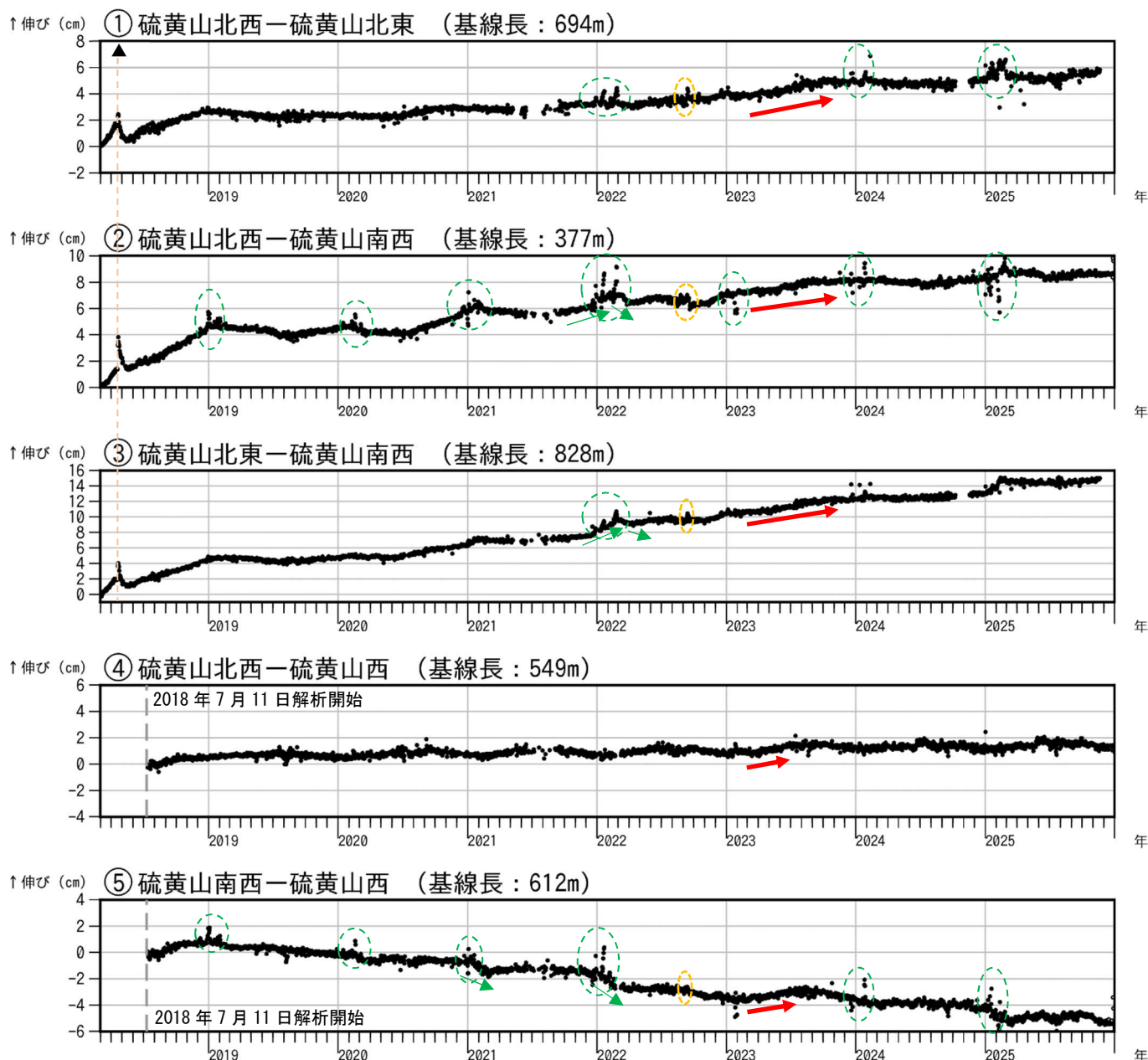


図9 霧島山（えびの高原（硫黄山）周辺） GNSS 連続観測による基線長変化

(2018年3月～2025年12月)

GNSS 連続観測では、硫黄山近傍の基線において、2023年5月頃から硫黄山の山体浅部における膨張を示すと考えられるわずかな伸びがみられていましたが（赤矢印）、同年11月頃から停滞しています。

これらの基線は図10の①～⑤に対応しています。

基線の空白部分は欠測を示しています。

緑色の破線内の変化は、地面の凍上の影響と考えられます。

橙色の破線内の変化は、台風等の気象要因の影響と考えられます。

②③⑤の基線において2021年1月及び同年12月頃から2022年3月頃にかけて認められる変化（緑矢印）は、硫黄山南西観測点の局所的な変動によるものと考えられます。

図上部の黒三角及び橙破線は、2018年4月19日及び同月26日の噴火の発生を示しています。

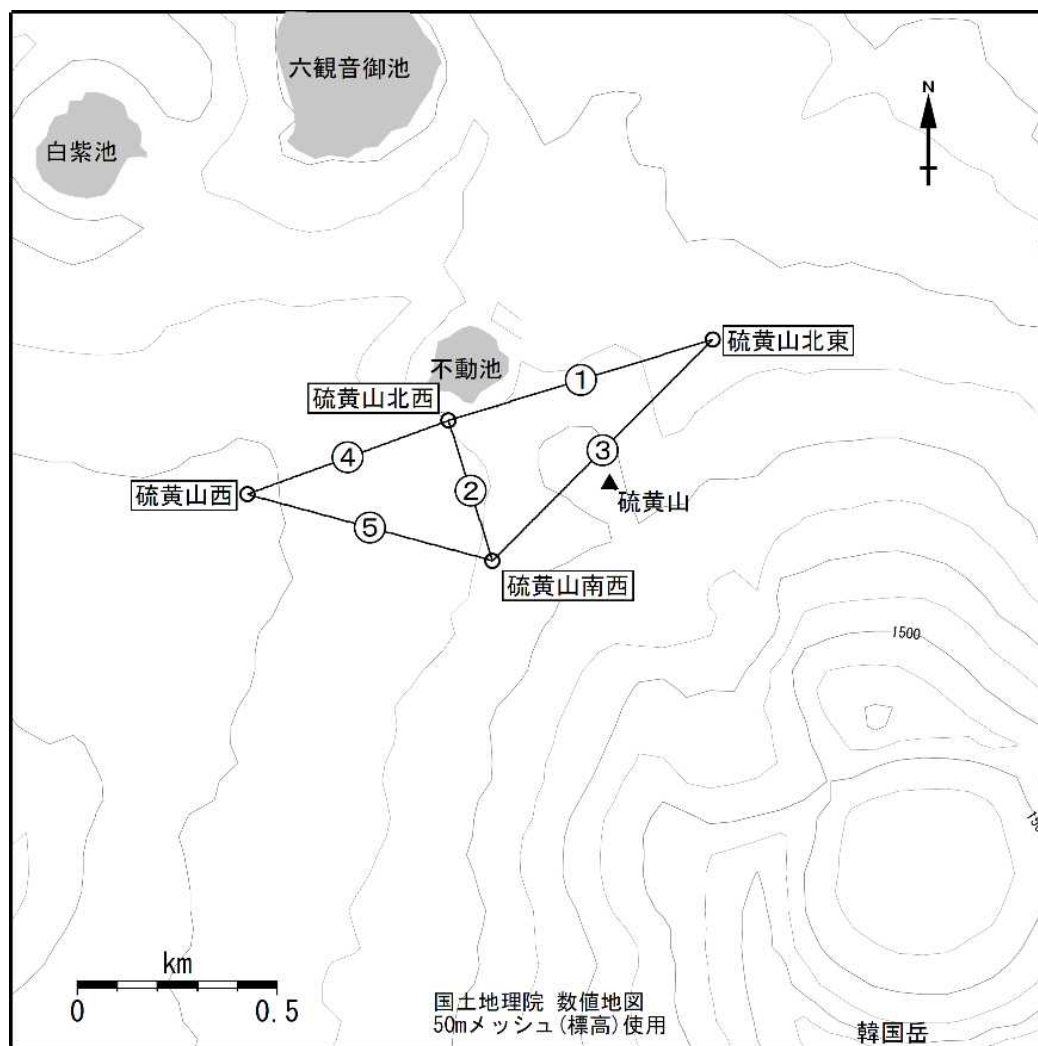


図10 霧島山（えびの高原（硫黄山）周辺） 図7及び図9のGNSS連続観測点と基線番号
白丸（○）は気象庁の観測点位置を示しています。



図 11-1 霧島山（えびの高原（硫黄山）周辺） 全磁力観測点配置図

2016年2月の観測開始以降の各観測点の全磁力の変化傾向（図 11-2 の変化傾向）を「■（増加傾向）」「■（減少傾向）」「■（傾向なし、またはデータ不足等により傾向不明）」でそれぞれ示しています。



図 11-2 霧島山（えびの高原（硫黄山）周辺） 全磁力観測点で観測された全磁力変動
(2016年1月～2025年12月)

観測開始（2016年2月）以降、硫黄山の北側の観測点で全磁力の増加（赤矢印）、南側の観測点では全磁力の減少（青矢印）といった、硫黄山周辺の地下での熱の高まりを示す変化が観測されています。

各観測点と地磁気観測所鹿屋観測施設（硫黄山の南約 60km）の全磁力差分値のうち、電離層の影響が小さくなる夜間の平均値（00:00～02:59（JST））を求め、日値としてプロットしています。

図上部の黒三角及び橙破線は、2018年4月19日及び26日の噴火の発生を示しています。

空白部分は欠測を示しています。

硫黄山北東2観測点で2025年1月頃から3月頃にみられる変動（緑破線内）は、観測点近傍での掘削工事によるものと考えられます。

【参考】全磁力観測について

火山活動が静穏なときの火山体は地球の磁場（地磁気）の方向と同じ向きに磁化されています。これは、火山を構成する岩石には磁化しやすい鉱物が含まれており、マグマや火山ガス等に熱せられていた山体が冷えていく過程で、地磁気の方に帯磁するためです。しかし、火山活動の活発化に伴い、マグマが地表へ近づくなどの原因で火山体内の温度が上昇するにつれて、周辺の岩石が磁力を失うようになります。これを「熱消磁」と言います。そして地下で熱消磁が発生すると、地表で観測される磁場の強さ（全磁力）が変化します。これらのことから、全磁力観測により火山体内部の温度の様子を知る手がかりを得ることができます。

例えば、火口直下で熱消磁が起きたとすると、火口の南側では全磁力の減少、火口北側では逆に全磁力の増大が観測されます。この変化は、熱消磁された部分に地磁気と逆向きの磁化が生じたと考えることで説明できます。火口周辺で観測した全磁力の値は、南側Aでは地磁気と逆向きの磁力線に弱められて小さく、北側Bでは強められて大きくなるのがわかります（図 11-3）。

ただし全磁力の変化は、熱消磁によるものだけでなく、地下の圧力変化などによっても生じることがあります。

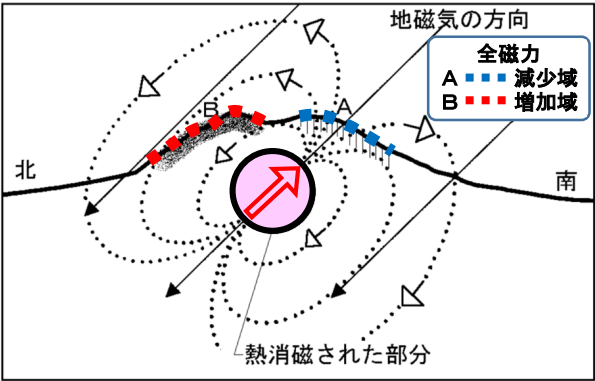


図 11-3 熱消磁に伴う全磁力変化のモデル

火山体周辺の全磁力変化と火山体内部の温度

観測点の全磁力変化	地下の岩石の磁化	火山体内の温度変化
北側で増加 南側で減少	消磁	上昇
北側で減少 南側で増加	帯磁	低下

大幡池

火山活動に特段の変化はなく、噴火の兆候は認められません。

○噴火警報・予報及び噴火警戒レベルの状況、2025年の発表履歴

2025 年中変更なし	噴火警戒レベル 1（活火山であることに留意）
-------------	------------------------

○2025年の活動概況

・噴煙などの表面現象の状況（図1～7、図8-①）

監視カメラによる観測では、噴煙は認められませんでした。

2月14日に大幡山山頂及び大幡池東側湖岸付近から実施した現地調査では、大幡池及び大幡山付近において噴気や地熱域は観測されませんでした。大幡池では、東側の湖岸付近の水面において湖底から火山ガスの噴出（気泡の湧出）を確認しましたが、前回（2024年3月14日）と比較して、目視での噴出の勢いやその量は減少していました。また、これまでと同様に、火山ガス（硫化水素）の臭気をわずかに感じました。

12月12日に陸上自衛隊第8飛行隊の協力により実施した上空からの観測では、大幡池及び大幡山の状況に特段の変化は認められませんでした。

・地震や微動の発生状況（図8-②、図9）

火山性地震の年回数は90回で、昨年比べて増加しました（2024年：58回）。3月13日には23回発生し、一時的に火山性地震が増加しました。

震源が求まった火山性地震は、大幡池の西側1～2km付近及び大幡山の西側2km付近の深さ約3～5kmに分布しました。

火山性微動は観測されませんでした。

・地殻変動の状況（図10、図11）

GNSS連続観測では、一部の基線で2025年1月頃から新燃岳付近の地下の膨張を示すと考えられるわずかな伸びが認められましたが、7月頃から停滞しています。

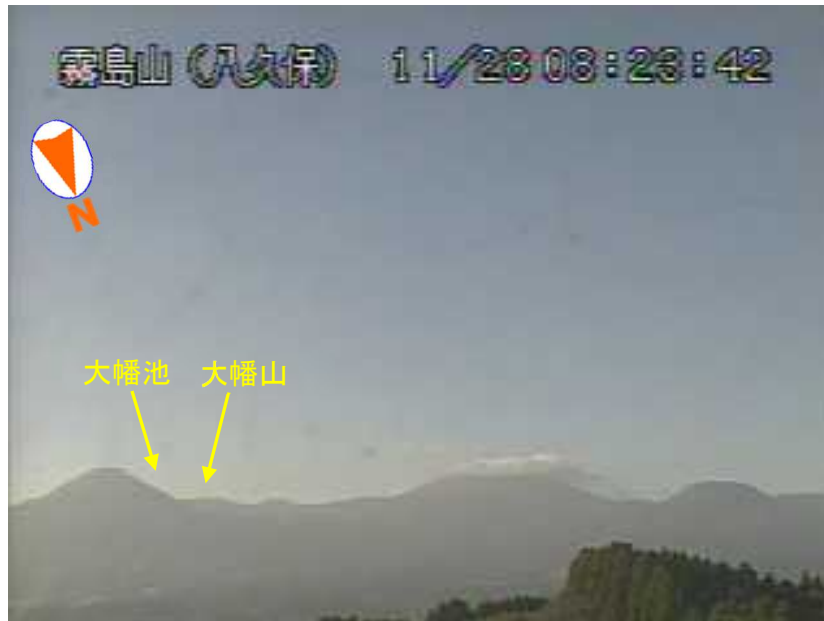


図1 霧島山（大幡池） 大幡池及び大幡山の状況（11月28日、八久保監視カメラ）
監視カメラによる観測では、噴煙は認められませんでした。

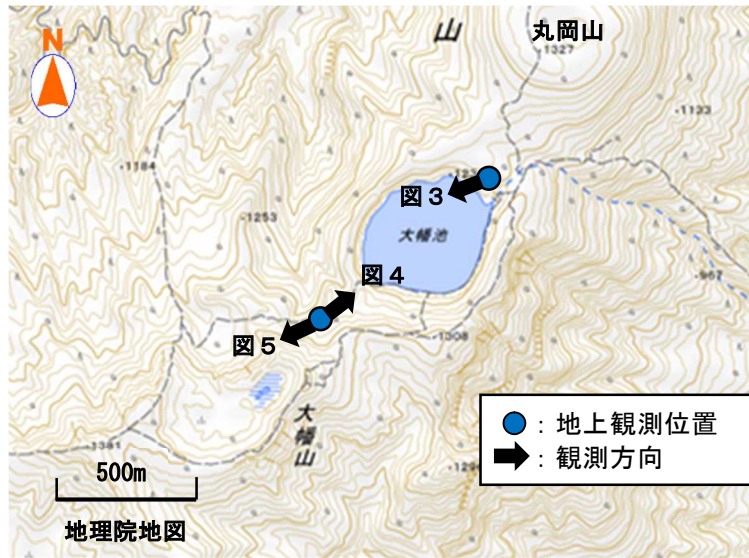
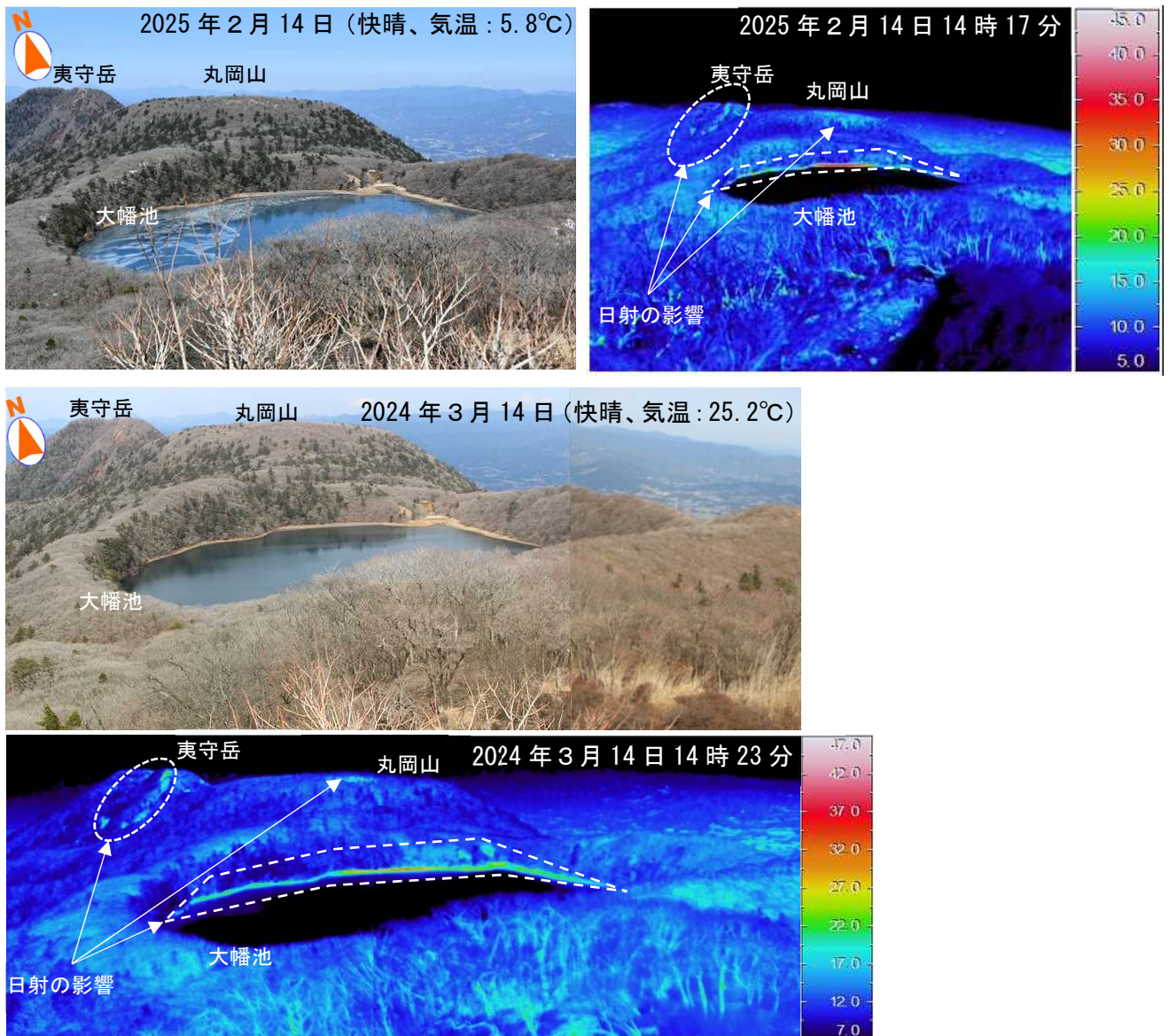


図2 霧島山（大幡池）図3～5の観測位置及び観測方向



図3 霧島山（大幡池）東側湖岸付近における火山ガス噴出状況

大幡池では、東側の湖岸付近の水面（黄色破線）において、前回観測（2024年3月14日）に引き続き湖底から火山ガスの噴出（気泡の湧出）を確認しましたが、前回と比較して、目視での噴出の勢いやその量は減少していました。また、これまでと同様に、火山ガス（硫化水素）の臭気をわずかに感じました。



大幡池付近では、噴気や地熱域は認められませんでした。

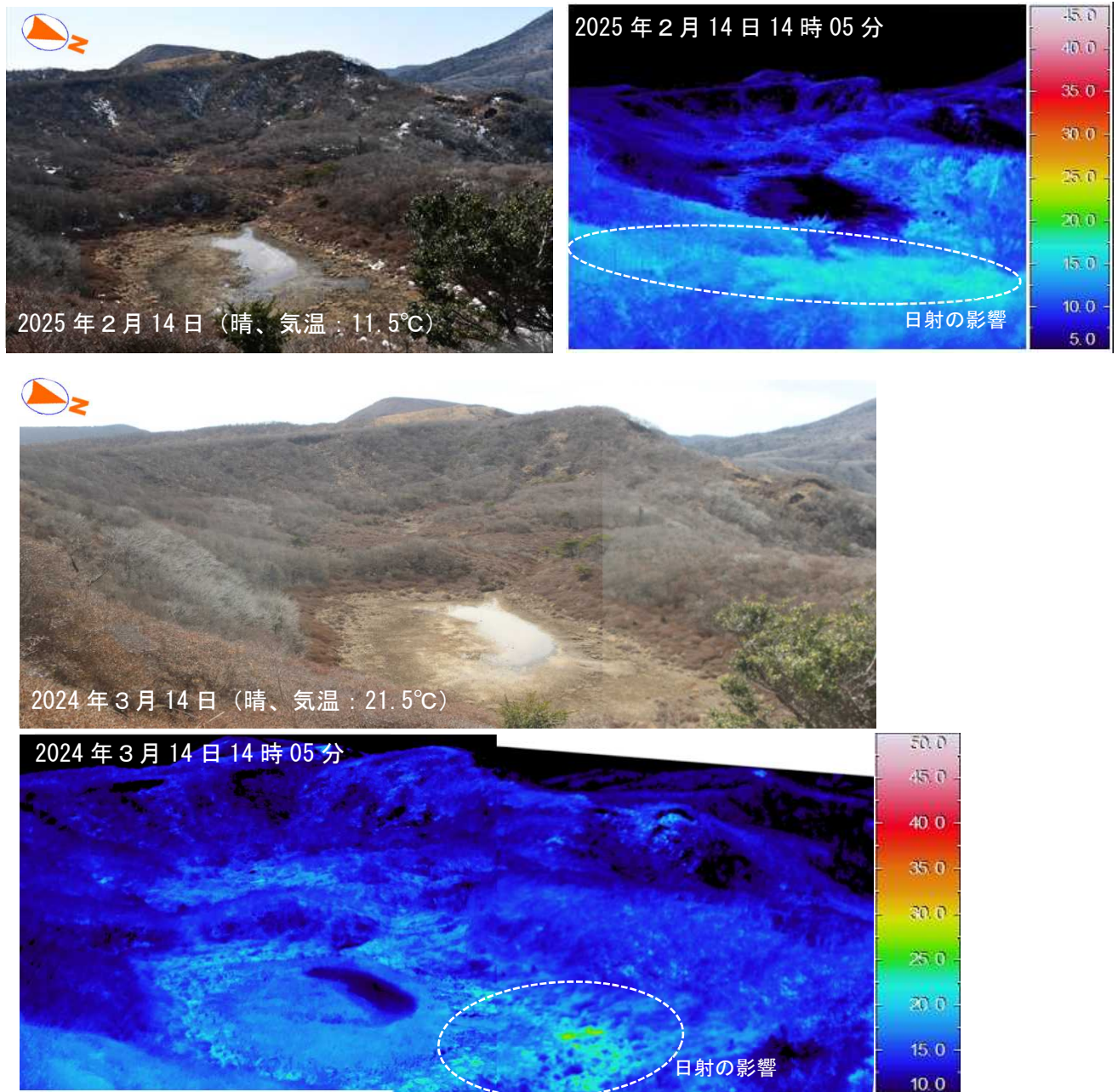


図5 霧島山（大幡池） 大幡山付近の状況（大幡山北東側から観測）

大幡山付近では、噴気や地熱域は認められませんでした。



図6 霧島山（大幡池） 図7の観測位置及び撮影方向（上空から観測）

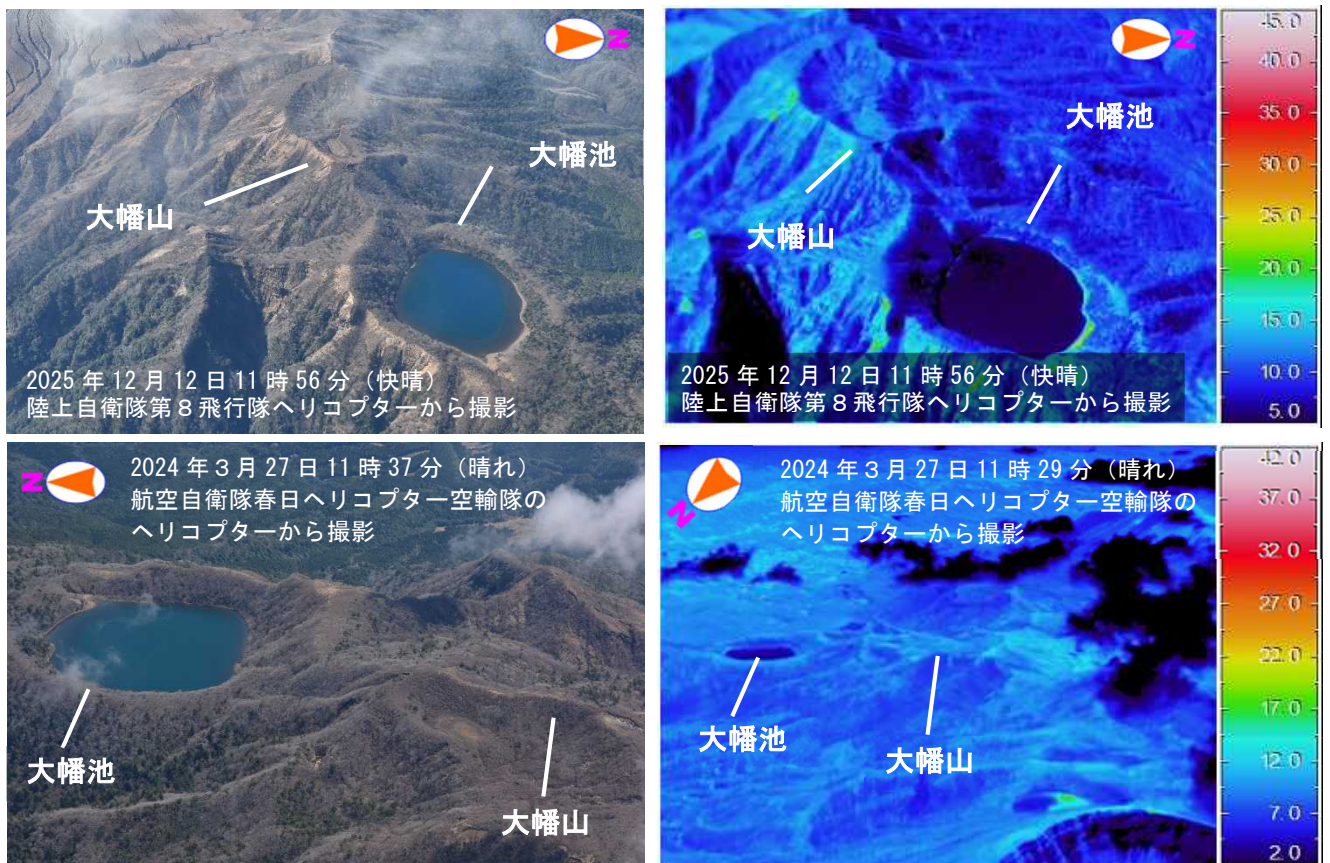


図7 霧島山（大幡池） 大幡池及び大幡山の状況（上空から観測）

大幡池及び大幡山の状況に特段の変化は認められませんでした。

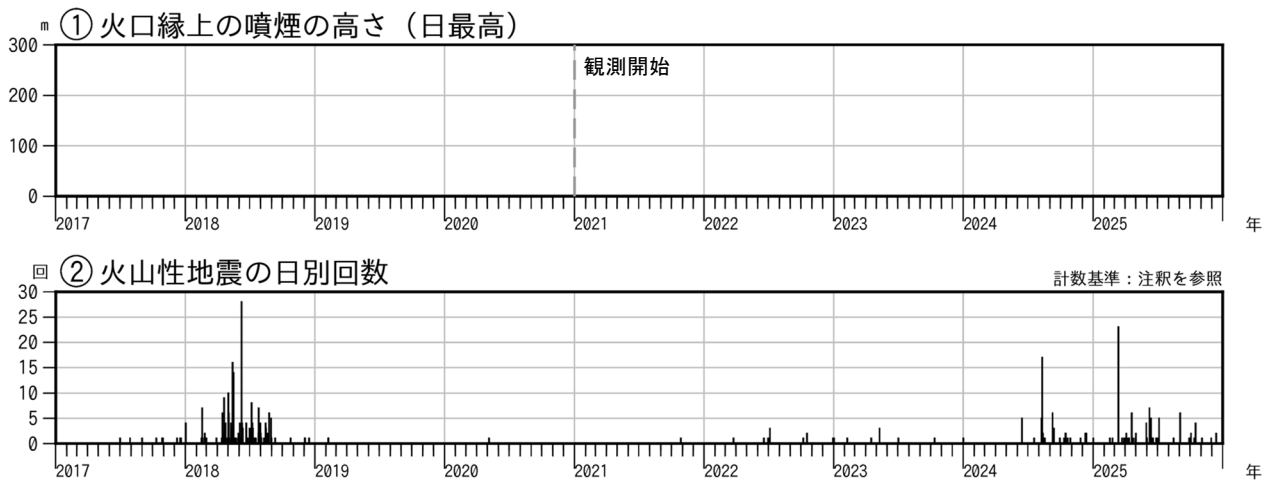


図8 霧島山（大幡池） 火山活動経過図（2017年1月～2025年12月）

<2025年の状況>

- ・監視カメラによる観測では、噴煙は認められませんでした。
- ・火山性地震の月回数は90回で、昨年に比べて増加しました(2024年：58回)。3月13日には23回発生し、一時的に火山性地震が増加しました。

大幡池付近の火山性地震の回数について、2020年12月31日までは「新燃岳南西観測点（計数基準 水平動： $2.0 \mu\text{m/s}$ ）」で計数していましたが、大幡池付近の地震活動をより正確に捉えるため、2021年1月から「大幡山登山口観測点（計数基準：南北成分： $6.0 \mu\text{m/s}$ ）」で計数しています。

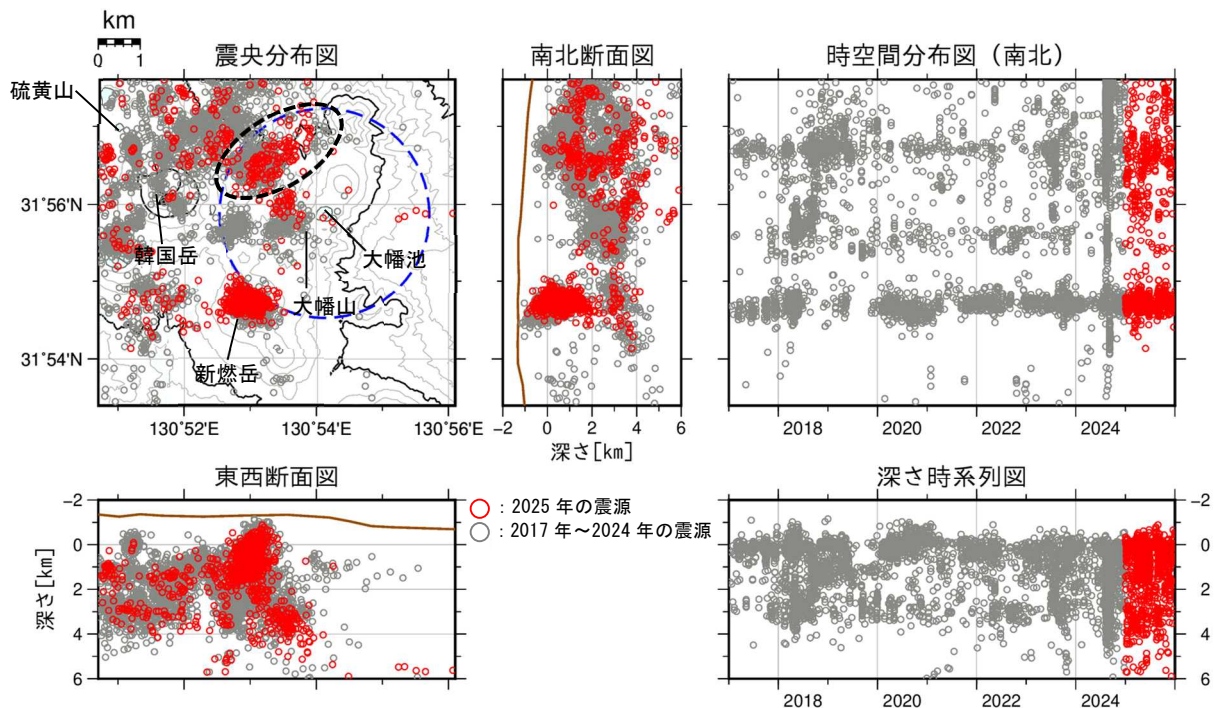


図9 霧島山（大幡池） 震源分布図（2012年～2025年）

<2025年の状況>

震源が求まった火山性地震は、大幡池の西側1～2 km 付近及び大幡山の西側2 km 付近の深さ約3～5 km に分布しました。

霧島山（大幡池）の火山活動については、主に大幡池及び大幡山付近（青破線内）の地震活動に注目して監視しています。大幡池及び大幡山付近では、新燃岳の火山活動が活発であった2018年3月から7月にかけて火山性地震の増加がみられたことがあります。

大幡池の北西側の地震（黒破線内）は、えびの高原周辺の地震として計数しています。

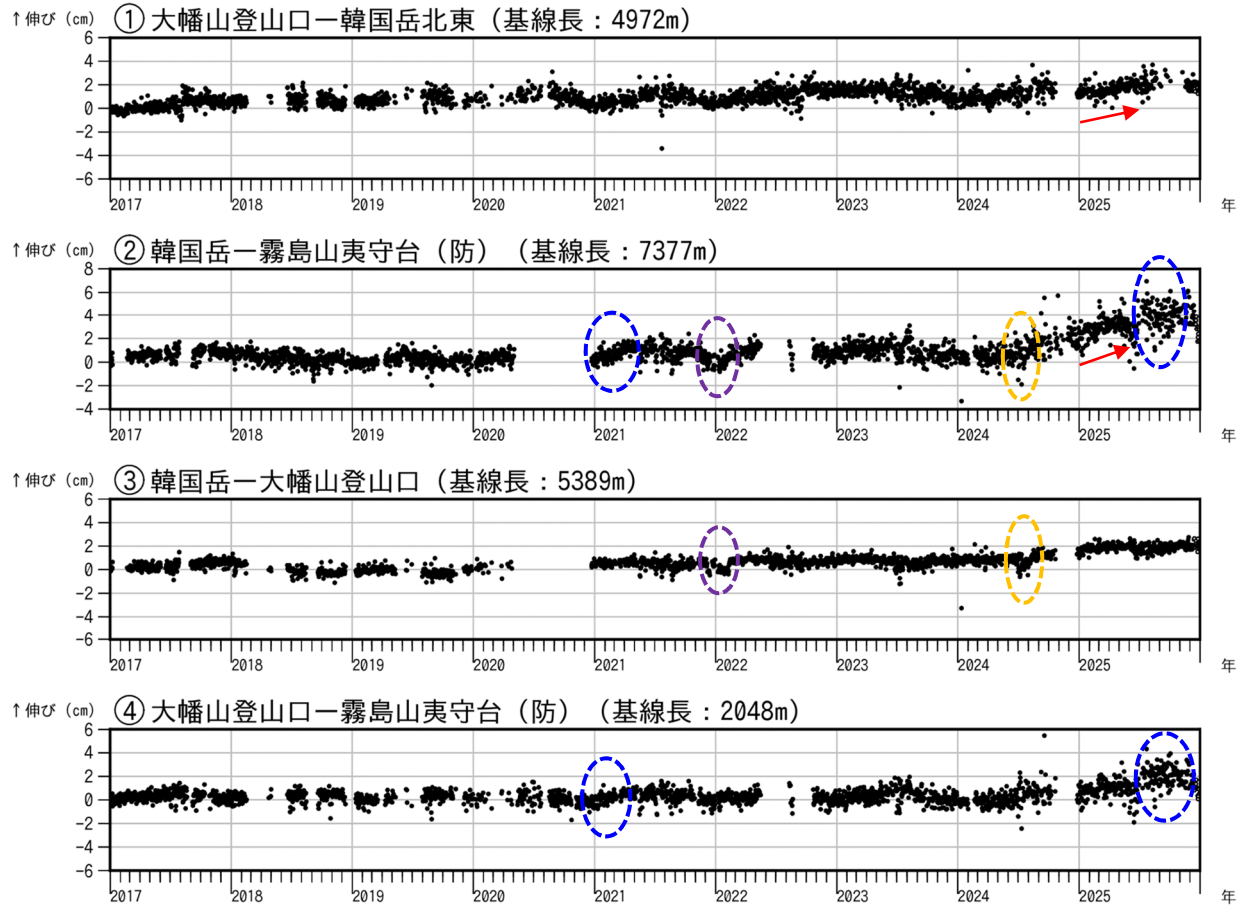


図 10 霧島山（大幡池） GNSS 連続観測による基線長変化（2015 年 1 月～2025 年 12 月）

GNSS 連続観測では、一部の基線で 2025 年 1 月頃から新燃岳付近の地下の膨張を示すと考えられるわずかな伸びが認められましたが（赤矢印）、7 月頃から停滞しています。

これらの基線は図 11 の①～④に対応しています。

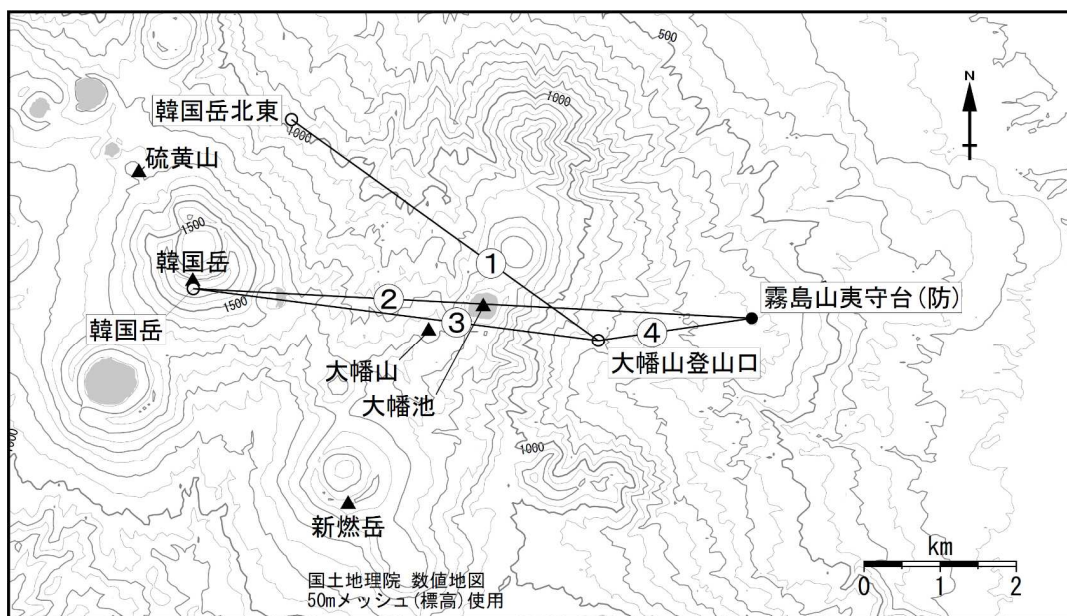
直近のデータは白丸で示しています。基線の空白部分は欠測を示しています。

青色の破線内の変化は、霧島山夷守台(防)観測点の局所的な変化に伴うものと考えられます。

紫色の破線内の変化は、韓国岳観測点の局所的な変化に伴うものと考えられます。

橙色の破線内の変化は、2024 年 8 月 8 日の日向灘の地震による変動です。

（防）：防災科学技術研究所



小さな白丸（○）は気象庁、小さな黒丸（●）は気象庁以外の機関の観測点位置を示しています。

（防）：防災科学技術研究所

図 11 霧島山（大幡池） GNSS 連続観測点と基線番号

新燃岳

新燃岳火口では、6月22日に火口内の北東側で噴火が発生し、その後も断続的に噴火活動がみられました。7月3日頃からは火口内の南東側でも噴火が発生しました。7月中旬以降噴火活動は次第に間欠的となり、9月8日以降噴火は観測されませんでした。新燃岳西側斜面の割れ目付近では、4月30日から再び噴気活動がみられ、白色の噴煙の高さは火口縁上100m以下で経過しました。

新燃岳火口直下を震源とする火山性地震は、2024年10月下旬頃から増減を繰り返し、6月22日の噴火発生前までその増分が次第に大きくなりました。6月下旬の噴火発生以降はやや減少したものの、概ね多い状態で経過しました。火山性微動は、主に噴火活動がみられた6月下旬から9月上旬にかけて断続的に発生しました。7月上旬頃からは噴火活動の活発化とともに継続時間の長い火山性微動が断続的に発生しましたが、8月中旬頃からは火山性微動の発生頻度が低下し、10月3日以降観測されませんでした。

火山ガス（二酸化硫黄）の放出量は、5月中旬頃までは検出されませんでした。噴火発生翌日の6月23日には、1日あたり4,000トンと急増が認められました。7月以降、放出量は緩やかな低下傾向が認められ、9月以降はやや少ない状態で経過しました。

GNSS連続観測では、霧島山を挟む一部の基線で、2025年3月頃から霧島山深部の膨張を示すと考えられる伸びの傾向が認められています。なお、同基線では、2025年7月上旬に、新燃岳の噴火活動に対応すると考えられるわずかな縮みがみられました。2024年11月頃からみられた新燃岳付近の地下における膨張を示すと考えられる基線の伸びは、2025年7月以降は認められません。

○噴火警報・予報及び噴火警戒レベルの状況、2025年の発表履歴

3月30日 3時53分	火口周辺警報を発表し、噴火警戒レベル2（火口周辺規制）から噴火警戒レベル3（入山規制）へ引上げ
4月2日 11時00分	火口周辺警報を発表し、噴火警戒レベル3（入山規制）を維持しつつ、警戒が必要な範囲を概ね4kmから概ね3kmに縮小
5月27日 11時00分	火口周辺警報を発表し、噴火警戒レベル3（入山規制）から噴火警戒レベル2（火口周辺規制）へ引下げ
6月23日 18時30分	火口周辺警報を発表し、噴火警戒レベル2（火口周辺規制）から噴火警戒レベル3（入山規制）へ引上げ
10月17日 11時00分	火口周辺警報を発表し、噴火警戒レベル3（入山規制）から噴火警戒レベル2（火口周辺規制）へ引下げ

○2025 年の活動概況

・噴煙など表面現象の状況（図1～8、図9-①、図10-①②、図11-①、表1）

監視カメラによる観測では、6月22日に新燃岳の火口内の北東側で噴火を観測しました。新燃岳で噴火を観測したのは2018年6月27日以来でした。その後も断続的に噴火活動がみられ、7月3日頃からは火口内の南東側でも噴火を観測しました。7月中旬以降、噴火活動は次第に間欠的となり、9月8日以降噴火は観測されませんでした。一連の噴火活動において、噴煙の最高高度は火口縁上5,500mまで上がりました。大きな噴石の飛散は確認されませんでした。新燃岳西側斜面の割れ目付近では、2024年12月下旬以降噴気は認められていませんでしたが、4月30日から再び噴気活動がみられ、白色の噴煙の高さは火口縁上100m以下で経過しました。

6月下旬から9月上旬にかけて繰り返し実施した降灰調査では、道路の白線が見えなくなるほどの多量の降灰を確認しました。7月4日に実施した聞き取りによる降灰調査では、鹿児島県鹿児島市、霧島市、湧水町、始良市、南さつま市、日置市の広い範囲で降灰を確認しました。8月28日に実施した現地調査及び聞き取りによる降灰調査では、鹿児島県霧島市、曾於市、鹿屋市、宮崎県都城市のそれぞれ一部で降灰を確認しました。

繰り返し実施した韓国岳山頂付近及び新湯温泉付近からの現地調査では、新燃岳の火口内及び西側斜面の割れ目付近において地熱域を確認しました。6月28日の観測では火口内の北東側から有色の噴煙が上がっており、火口内では噴煙による熱域を確認しました。8月5日以降の観測では白色の噴煙が上がっており、6月28日と比較して火口内の北東側からの噴煙の量が減少していることを確認しました。新燃岳西側斜面の割れ目付近では、白色の噴煙が上がっていることを確認しました。割れ目付近における地熱域は拡大と縮小を繰り返していますが、10月頃から拡大傾向が認められます。

6月30日に鹿児島県の協力により実施した上空からの観測では、火口内の北東側から乳白色の噴煙が上がっていることを確認しました。赤外熱映像装置による観測では、新燃岳火口内の北東側において、列状に並んだ複数の火孔から噴煙に対応した熱域を確認しました。12月12日に陸上自衛隊第8飛行隊の協力により実施した上空からの観測では、火口内の北東側では弱い白色噴煙が上がっており、6月30日の観測時より噴煙の量が減少していることを確認しました。7月3日頃に噴火が確認された火口内の南東側では、白色の噴煙が数百m程度上がっていることを確認しました。赤外熱映像装置による観測では、6月30日の観測と比較できる範囲においては地熱域の分布に特段の変化は認められませんでした。

・地震や微動の発生状況（図9-③④、図10-④⑤⑥、図11-②③、図12～13）

新燃岳火口直下を震源とする火山性地震は、2024年10月下旬頃から増減を繰り返し、6月22日の噴火発生前までその増分が次第に大きくなりました。6月下旬の噴火発生以降はやや減少したものの、概ね多い状態で経過しました。

火山性地震の年回数は14,020回（2024年：2,353回）でした。震源は、主に新燃岳火口直下のごく浅いところから深さ2km付近に分布しました。その他に、新燃岳火口の西側2km付近の深さ1～5km付近及び大幡山付近の深さ3～4km付近に分布しました。

火山性微動は、主に噴火活動がみられた6月下旬から9月上旬にかけて断続的に発生しました。3月30日には傾斜変動を伴う継続時間が10分間程度の火山性微動が発生しました。7月上旬頃からは噴火活動の活発化とともに継続時間の長い火山性微動が断続的に発生しましたが、8月中

旬頃からは火山性微動の発生頻度が低下し、10月3日以降観測されませんでした。

・火山ガスの状況（図9-②、図10-③）

火山ガス（二酸化硫黄）の放出量は、5月中旬頃までは検出されませんでした。噴火発生翌日の6月23日には、1日あたり4,000トンと急増が認められました。7月以降、放出量は緩やかな低下傾向が認められ、9月以降はやや少ない状態で経過しました。

・地殻変動の状況（図9-⑤、図10-⑦、図14～18）

GNSS連続観測では、霧島山を挟む一部の基線で、2025年3月頃から霧島山深部の膨張を示すと考えられる伸びの傾向が認められています。なお、同基線では、2025年7月上旬に、新燃岳の噴火活動に対応すると考えられるわずかな縮みがみられました。2024年11月頃からみられた新燃岳付近の地下における膨張を示すと考えられる基線の伸びは、2025年7月以降は認められません。

新燃岳近傍の傾斜計では、3月30日02時50分頃から山体の膨張を示す0.1マイクロラジアン以上の地殻変動を観測し、その後収縮を示す変動がみられました。新燃岳周辺の傾斜計では、6月22日12時頃から15時頃にかけて、火山性微動の発生に伴い、山体の膨張及び収縮を示す地殻変動が時々観測されました。噴火活動がみられた6月下旬から9月上旬にかけては、新燃岳付近の膨張と噴火に伴う収縮を示すと考えられる傾斜変動が時々みられました。

新燃岳周辺の傾斜計では、4月下旬及び7月中旬に新燃岳の北西側が変動源の可能性がある北西上がりの緩やかな傾斜変動、7月上旬に北西下がりの緩やかな傾斜変動が認められました。

・噴火に伴う火山灰について

産業技術総合研究所（※）によると、6月22日以降の噴火活動に伴う火山灰は、いずれも新燃岳山頂火口内の既存の溶岩（2011年や2018年の溶岩等）が吹き飛ばされたものが主であるものの、7月2日頃以降の火山灰には、今回新たに供給されたマグマの可能性がある粒子が少量含まれていました。

※産業技術総合研究所・地質調査総合センター「霧島山新燃岳 2025年噴火に関する調査結果」

<https://www.gsj.jp/hazards/volcano/kirishima/index.html>



図 1-1 霧島山（新燃岳） 監視カメラによる噴火の状況（八久保監視カメラ・高原西麓監視カメラ）
（左図：噴火開始時の6月22日15時25分 右図：7月3日の噴火）

- ・ 噴火開始時には噴煙（黄色破線内）は火口縁上500m以上に上がり、東へ流れました。
- ・ 7月3日13時49分の噴火では、噴煙は最高で火口縁上5,000mまで上がりました。



図 1-2 霧島山（新燃岳） 監視カメラによる噴火の状況（大浪池監視カメラ（鹿児島県設置））

6月22日以降、新燃岳火口内の北東側で噴火活動がみられていましたが、7月4日には、監視カメラにより新たに新燃岳火口内の南東側における噴火の発生を確認しました。



図 1-3 霧島山（新燃岳） 監視カメラによる噴火の状況

（左図：高原西麓監視カメラ、右図：八久保監視カメラ）

8月28日04時53分の噴火では、噴煙は火口縁上5,500mまで上がりました。2025年の一連の噴火活動の中で最も噴煙が高く上がった噴火でした。



図2 霧島山（新燃岳） 宮崎県高原町広原の降灰状況（6月22日）

6月22日に実施した現地調査では、宮崎県高原町広原において、道路の白線が見えなくなるほどの多量の降灰を確認しました。小さな噴石は確認されませんでした。



図3 霧島山（新燃岳） 鹿児島県霧島市の降灰状況（7月3日）

7月3日に実施した現地調査では、鹿児島県霧島市及び宮崎県えびの市で降灰を確認し、霧島市牧園町の一部では道路の白線が見えなくなるほどの多量の降灰を確認しました。小さな噴石は確認されませんでした。

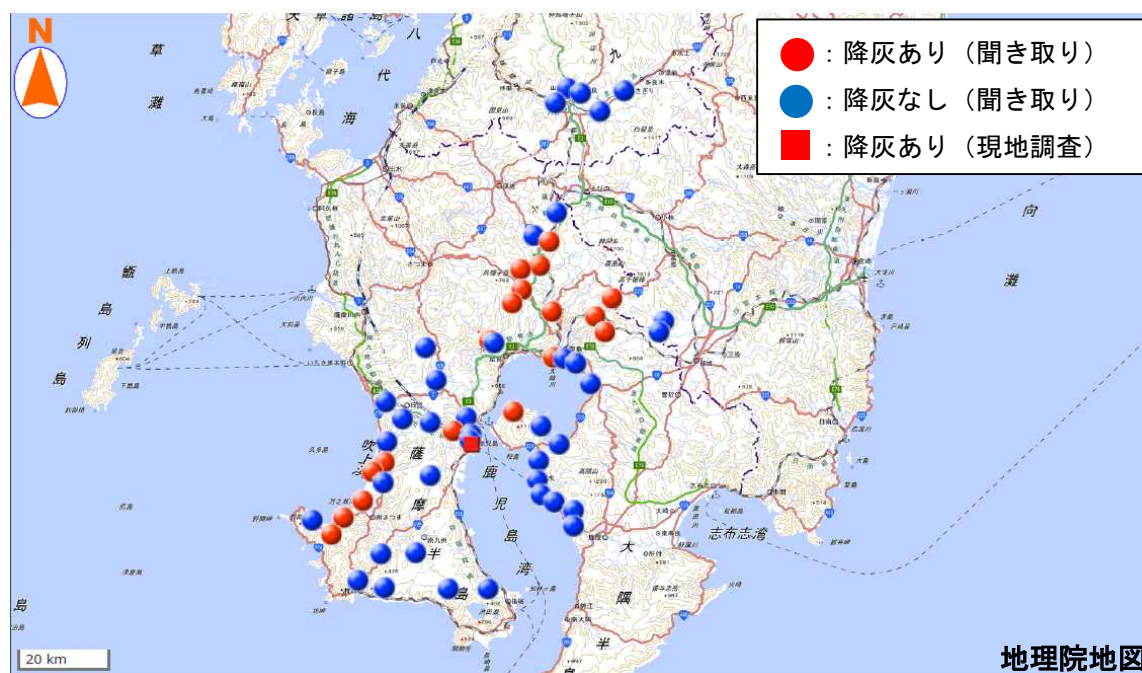


図4 霧島山（新燃岳） 降灰分布図（7月4日）

7月4日に実施した聞き取りによる降灰調査では、鹿児島県鹿児島市、霧島市、湧水町、姦良市、南さつま市、日置市の広い範囲で降灰を確認しました。

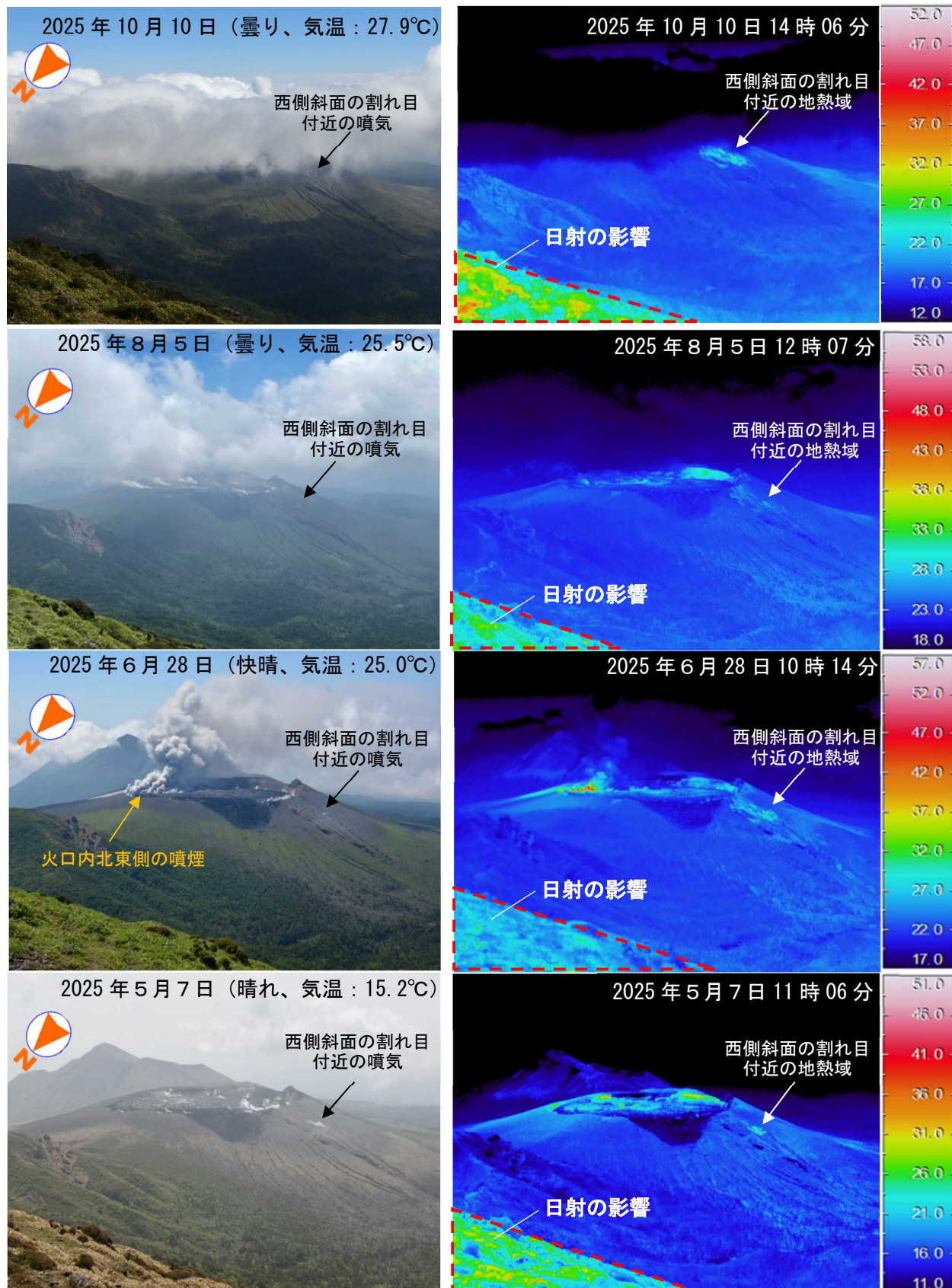


図5 霧島山（新燃岳） 火口内及び西側斜面の状況（韓国岳山頂付近から観測）

- ・韓国岳山頂付近から実施した現地調査では、6月28日に火口内の北東側（橙矢印）から有色の噴煙が上がっており、火口内では噴煙による熱域を確認しました。8月5日以降は白色の噴煙が上がっており、6月28日と比較して火口内の北東側からの噴煙の量が減少していることを確認しました。
- ・火口外の北側斜面では、6月28日に火山灰が堆積したような灰白色の領域が認められ、周囲より高い温度であることを確認しました。8月5日以降では、北側斜面の熱域は確認されませんでした。
- ・新燃岳西側斜面の割れ目付近では、白色の噴煙が上がっていることを確認しました。西側斜面の割れ目付近の地熱域は8月5日に縮小したものの、10月10日には拡大していることを確認しました。

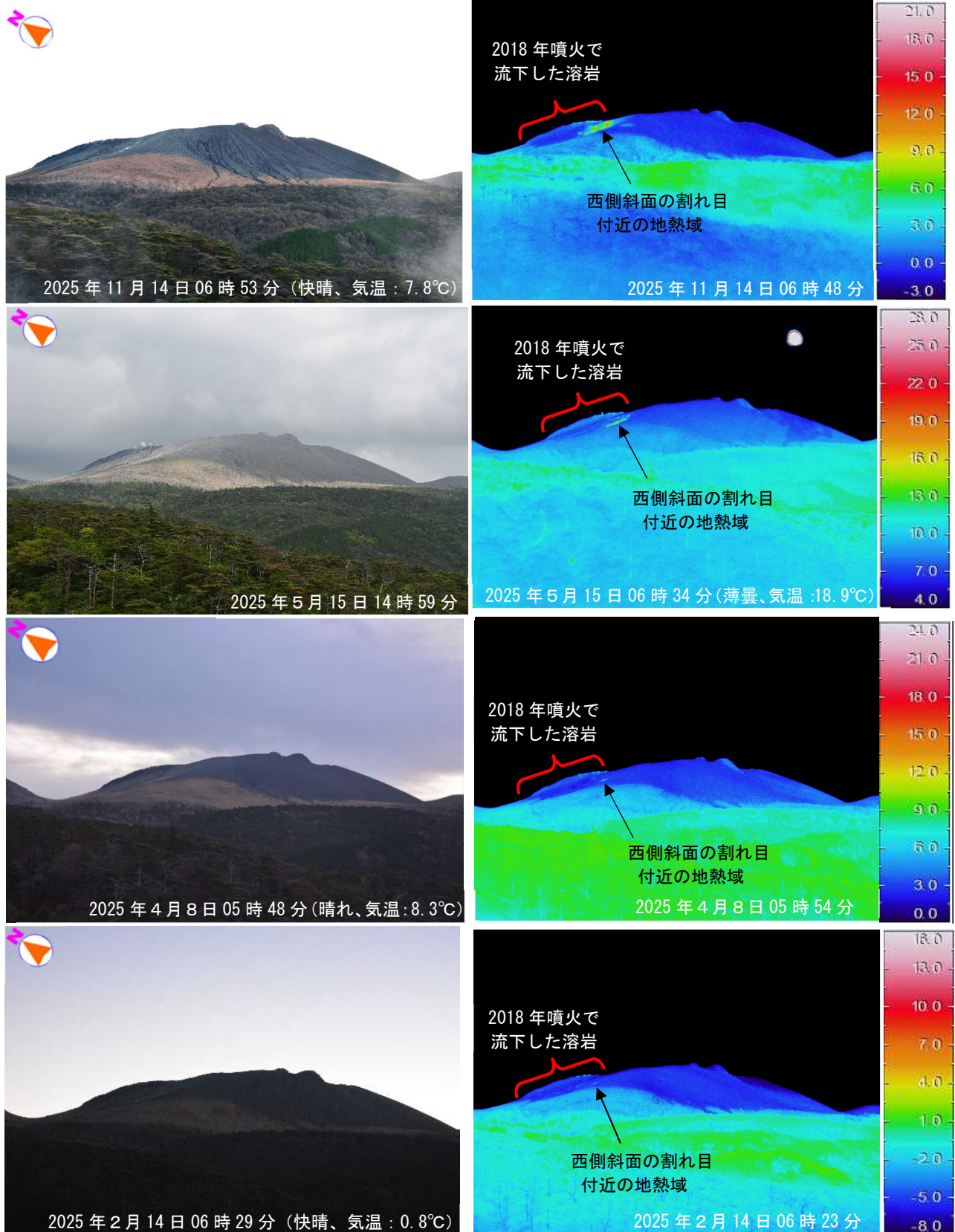


図6 霧島山（新燃岳） 新燃岳南西側の状況（新湯温泉付近から観測）

- ・新湯温泉付近から実施した現地調査では、2018 年噴火で流下した溶岩の上部で弱い噴気が上がっており、わずかな地熱域を確認しました。
- ・新燃岳西側斜面の割れ目付近では、2月14日及び4月8日には噴気は確認されませんでした。5月15日以降は白色の噴気が上がっていることを確認しました。西側斜面の割れ目付近の地熱域は、5月15日に拡大し、11月14日にはさらに拡大していることを確認しました。

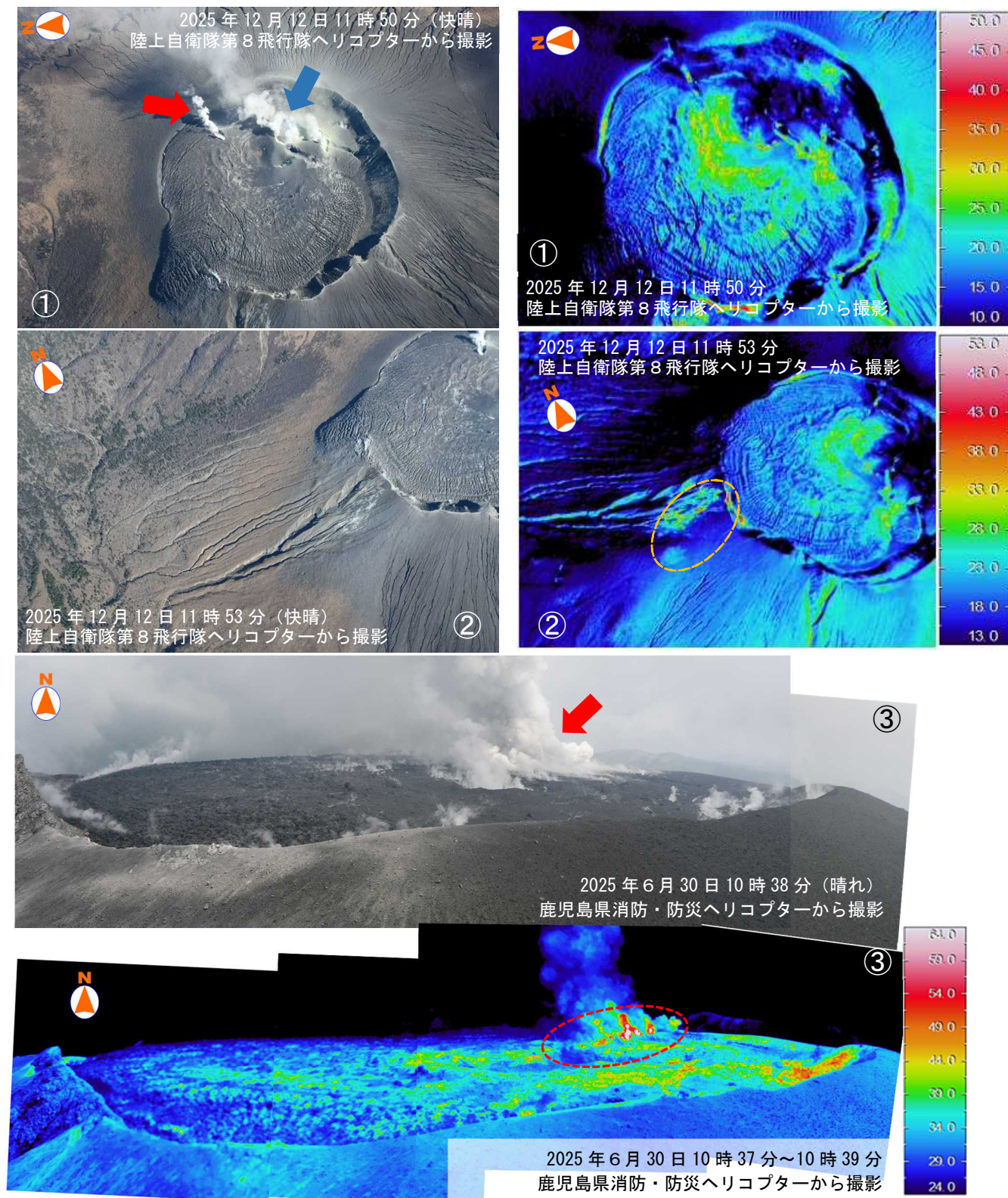


図7 霧島山（新燃岳） 新燃岳火口内及び西側割れ目の状況（上空から観測）

- ・6月30日に鹿児島県の協力により実施した上空からの観測では、火口内の北東側（赤矢印）から乳白色の噴煙が上がっていることを確認しました。赤外熱映像装置による観測では、新燃岳火口内の北東側において、列状に並んだ複数の火孔から噴煙に対応した熱域を確認しました（赤破線内）。
- ・12月12日に陸上自衛隊第8飛行隊の協力により実施した上空からの観測では、火口内及び火口縁辺部で白色噴煙が上がっていることを確認しました。火口内の北東側では、弱い白色噴煙が上がっており、6月30日の観測時より噴煙の量が減少していることを確認しました。7月上旬に噴火が確認された火口内の南東側（青矢印）では、白色の噴煙が数百m程度上がっていることを確認しました。赤外熱映像装置による観測では、6月30日の観測と比較できる範囲においては地熱域の分布に特段の変化は認められませんでした。新燃岳西側斜面の割れ目付近（橙破線内）では、引き続き地熱域を確認しました。



図 8 霧島山（新燃岳） 図 3 及び図 5～7 の観測位置及び撮影方向

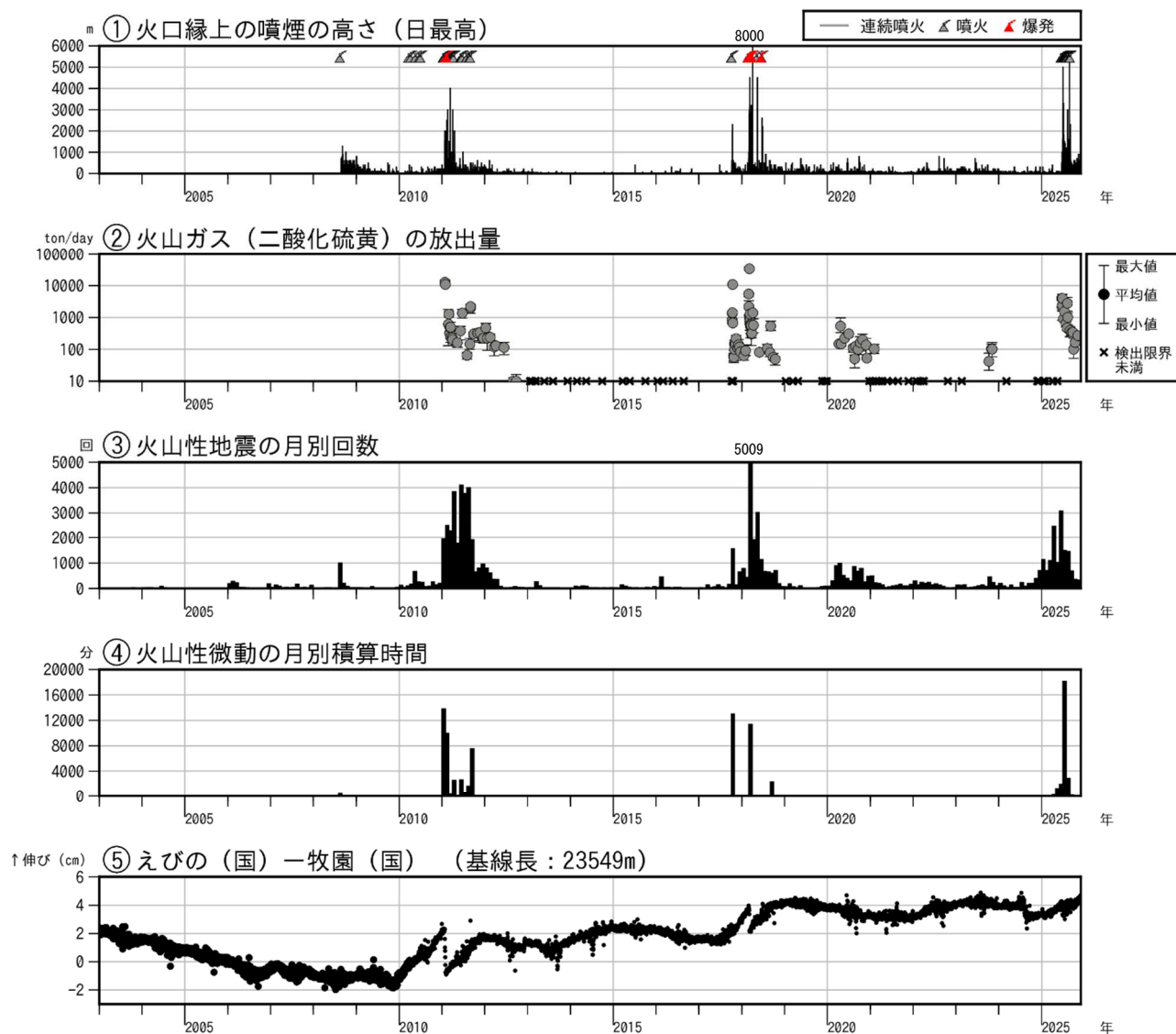


図9 霧島山（新燃岳） 火山活動経過図（2003年1月～2025年12月）

③について、火山性微動の振幅が大きい状態では、振幅の小さな火山性地震の回数は計数できなくなっています。

⑤の基線は図18の基線⑦に対応しています。

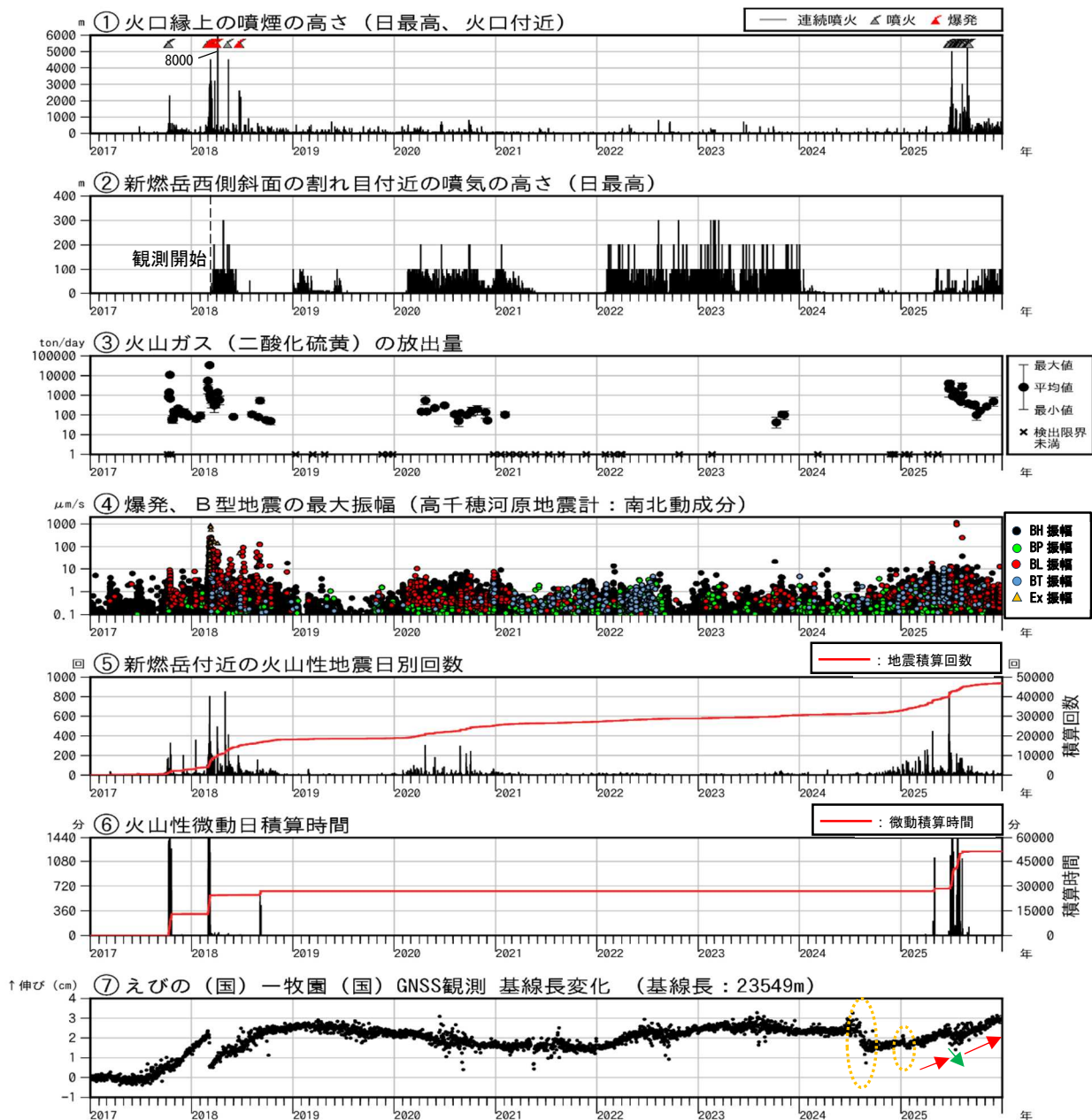


図10 霧島山（新燃岳） 火山活動経過図（2017年1月～2025年12月）

<2025年の状況>

- ・6月22日に新燃岳火口で噴火が発生し、その後も断続的に噴火活動がみられました。7月中旬以降噴火活動は次第に間欠的となり、9月8日以降噴火は観測されませんでした。新燃岳西側斜面の割れ目付近では、4月30日から再び噴気活動がみられ、白色の噴煙の高さは火口縁上100m以下で経過しました。
- ・火山ガス（二酸化硫黄）の放出量は、5月中旬頃までは検出されませんでした。噴火発生翌日の6月23日には1日あたり4,000トンと急増が認められました。9月以降はやや少ない状態で経過しました。
- ・火山性地震は2024年10月下旬頃から増減を繰り返し、6月22日の噴火発生前までその増分が次第に大きくなりました。6月下旬の噴火発生以降はやや減少したものの、概ね多い状態で経過しました。火山性地震の年回数は14,020回（2024年：2,353回）でした。火山性微動は、主に噴火活動がみられた6月下旬から9月上旬にかけて断続的に発生しました。7月上旬頃からは継続時間の長い火山性微動が断続的に発生しましたが、8月中旬頃からは発生頻度が低下し、10月3日以降は観測されませんでした。
- ・GNSS連続観測では、霧島山を挟む一部の基線で、2025年3月頃から霧島山深部の膨張を示すと考えられる伸びの傾向が認められています（赤矢印）。なお、同基線では、2025年7月上旬に、新燃岳の噴火活動に対応すると考えられるわずかな縮みがみられました（緑矢印）。

⑤について、火山性微動の振幅が大きい状態では、振幅の小さな火山性地震の回数は計数できなくなっています。

⑦の基線は図18の基線⑦に対応しています。

⑦の橙色破線内の変化は、日向灘の地震（2024年8月8日、2025年1月13日）による変動です。

※新燃岳南西観測点地震計の機器障害により、新燃西（震）観測点、霧島南（震）観測点および高千穂河原観測点で計数している期間があります。

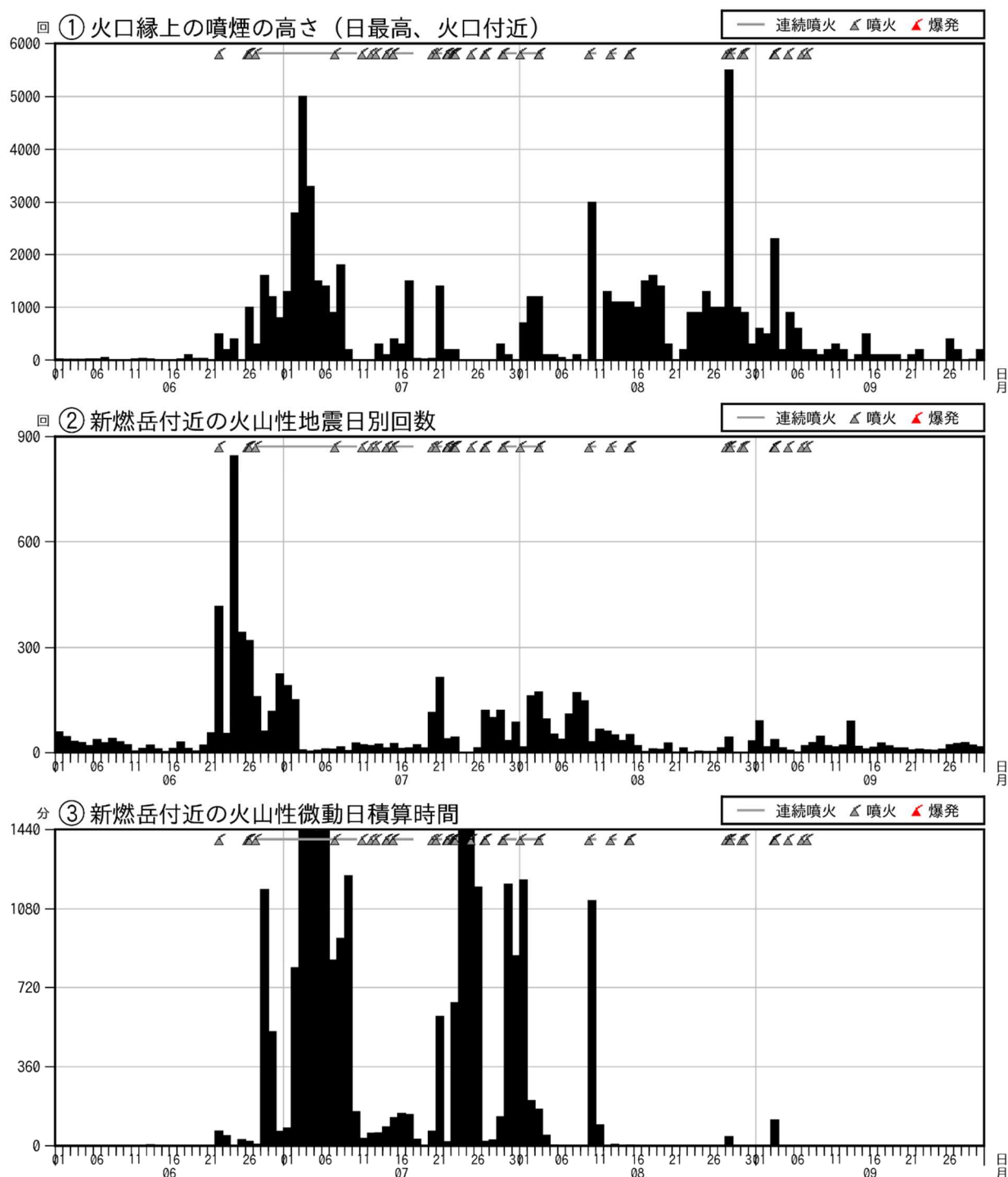


図 11 霧島山（新燃岳） 火口縁上の噴煙の高さ（上段）、火山性地震の日別回数（中段）及び火山性微動の日積算時間（下段）（2025 年 6 月 1 日～9 月 30 日）

- ・新燃岳では、6 月下旬に火口直下を震源とする火山性地震が急増する中で噴火が発生し、以降、断続的な噴火活動がみられました。7 月上旬頃からは噴火活動の活発化とともに継続時間の長い火山性微動が断続的に発生しました。
- ・8 月中旬頃からは噴火の発生間隔が長くなり、火山性微動の発生頻度が低下しました。9 月 8 日以降噴火は観測されませんでした。
- ・火口直下を震源とする火山性地震は 9 月頃から減少していますが、概ね多い状態で経過しました。

②について、火山性微動の振幅が大きい状態では、振幅の小さな火山性地震の回数は計数できなくなっています。

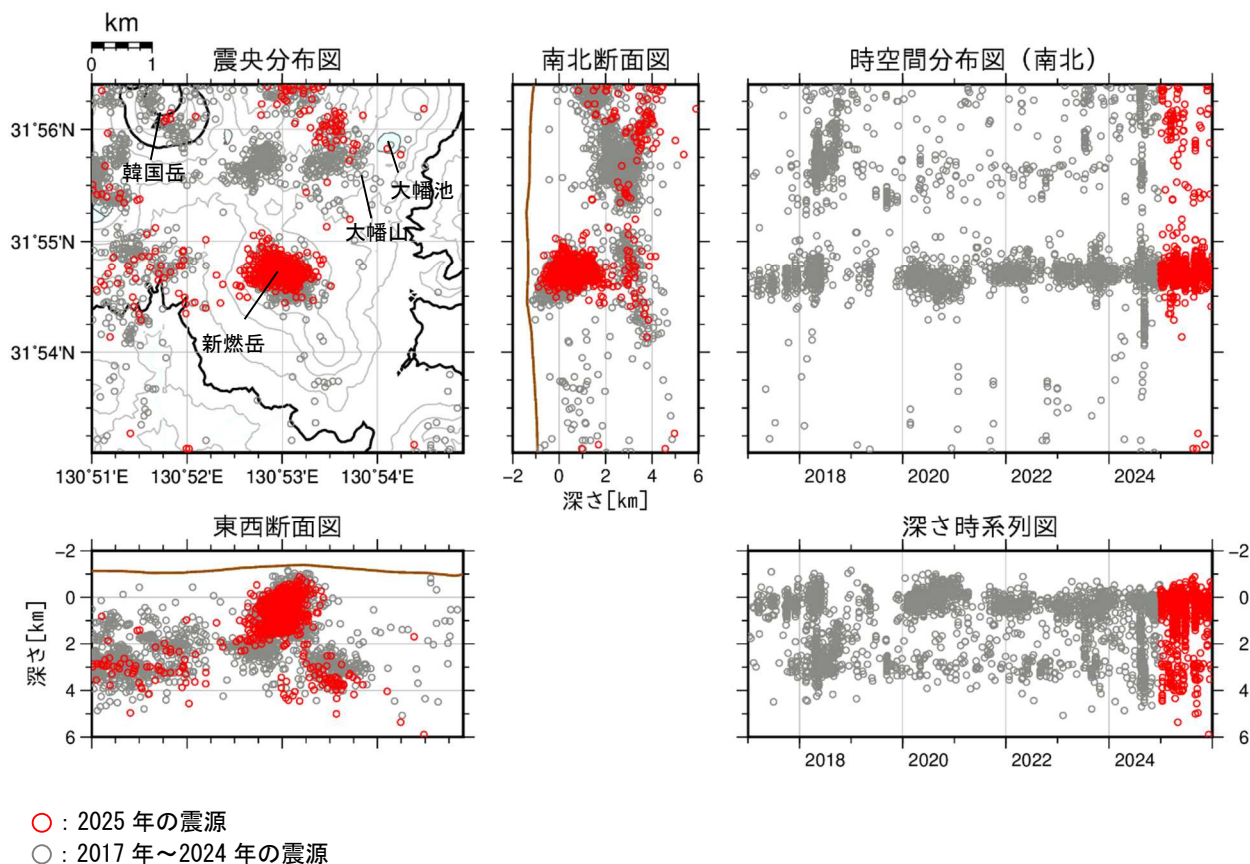


図 12 霧島山（新燃岳） 震源分布図（2017 年～2025 年）

<2025 年の状況>

震源は、主に新燃岳火口直下のごく浅いところから深さ 2 km 付近に分布しました。その他に、新燃岳火口の西側 2 km 付近の深さ 1 ～ 5 km 付近及び太幡山付近の深さ 3 ～ 4 km 付近に分布しました。

※観測点の障害により、震源が求まらなかった期間があります。

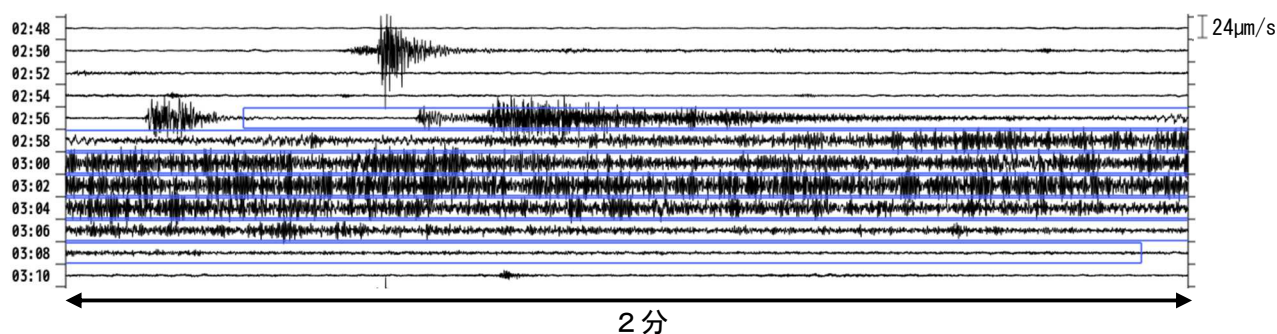


図13 霧島山（新燃岳） 3月30日02時56分に発生した火山性微動の状況
（新燃西（震）地震計：速度波形南北動成分）

3月30日02時56分に継続時間が10分間程度の火山性微動が発生しました（青枠内）。

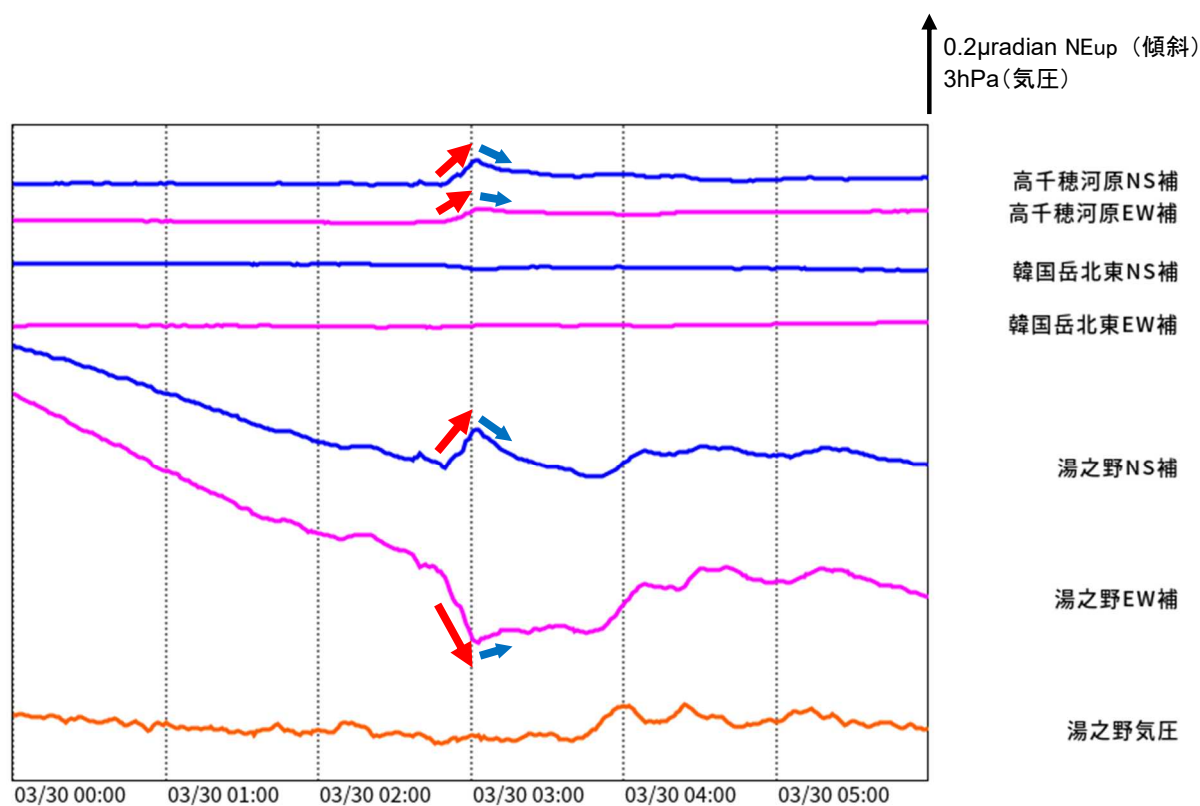


図14 霧島山（新燃岳） 傾斜計による地殻変動の状況（分値）（3月30日00時00分～06時00分）

新燃岳近傍に設置している傾斜計では、3月30日に山体の膨張（赤矢印）および収縮（青矢印）を示す変動がみられました。

各観測点の成分名に付記された「補」の文字は、そのデータが潮汐補正済みであることを示しています。

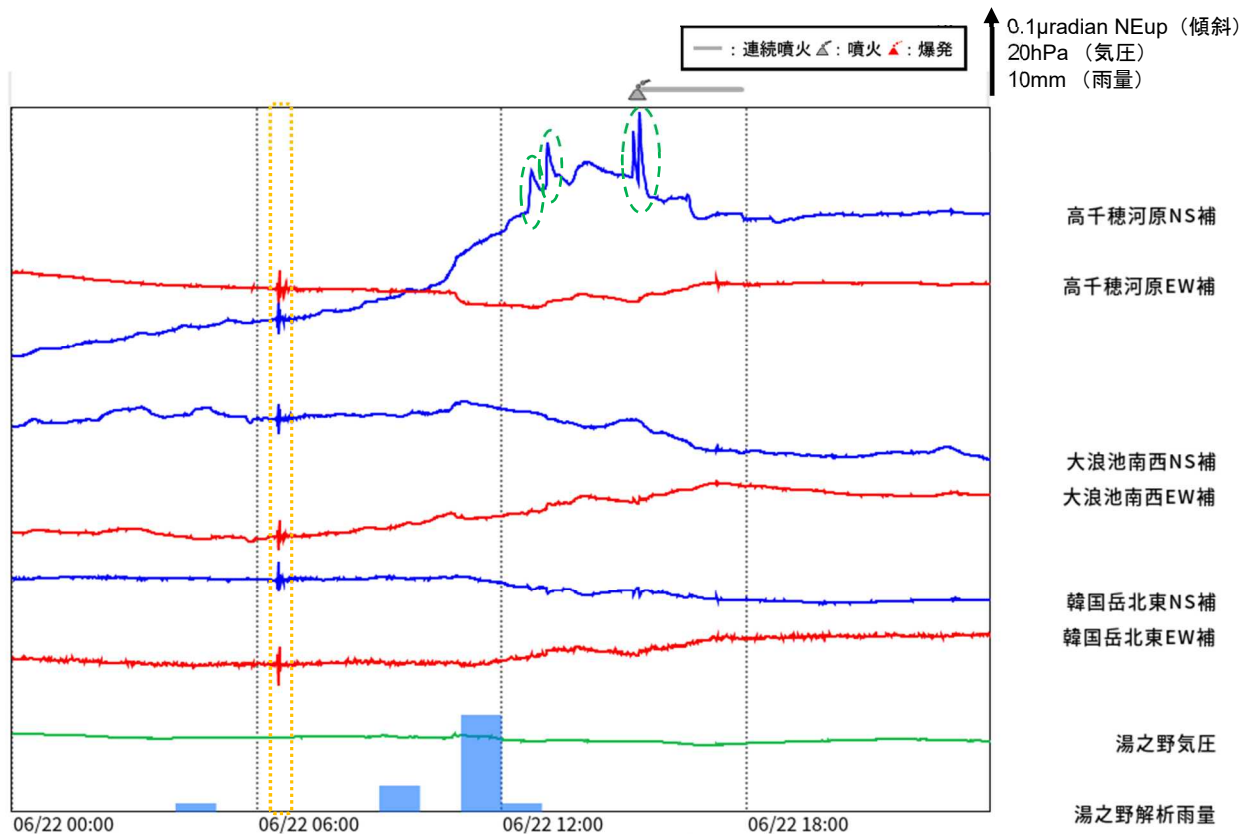


図 15 霧島山（新燃岳） 傾斜計による地殻変動の状況（分値）（6月22日00時～6月23日00時）

新燃岳周辺の傾斜計では、6月22日12時頃から15時頃にかけて、火山性微動の発生に伴い、山体の膨張及び収縮を示す地殻変動が時々認められました（緑色破線内）。

橙色破線内の変化は、遠地地震による変動です。

各観測点の成分名に付記された「補」の文字は、そのデータが潮汐補正済みであることを示しています。

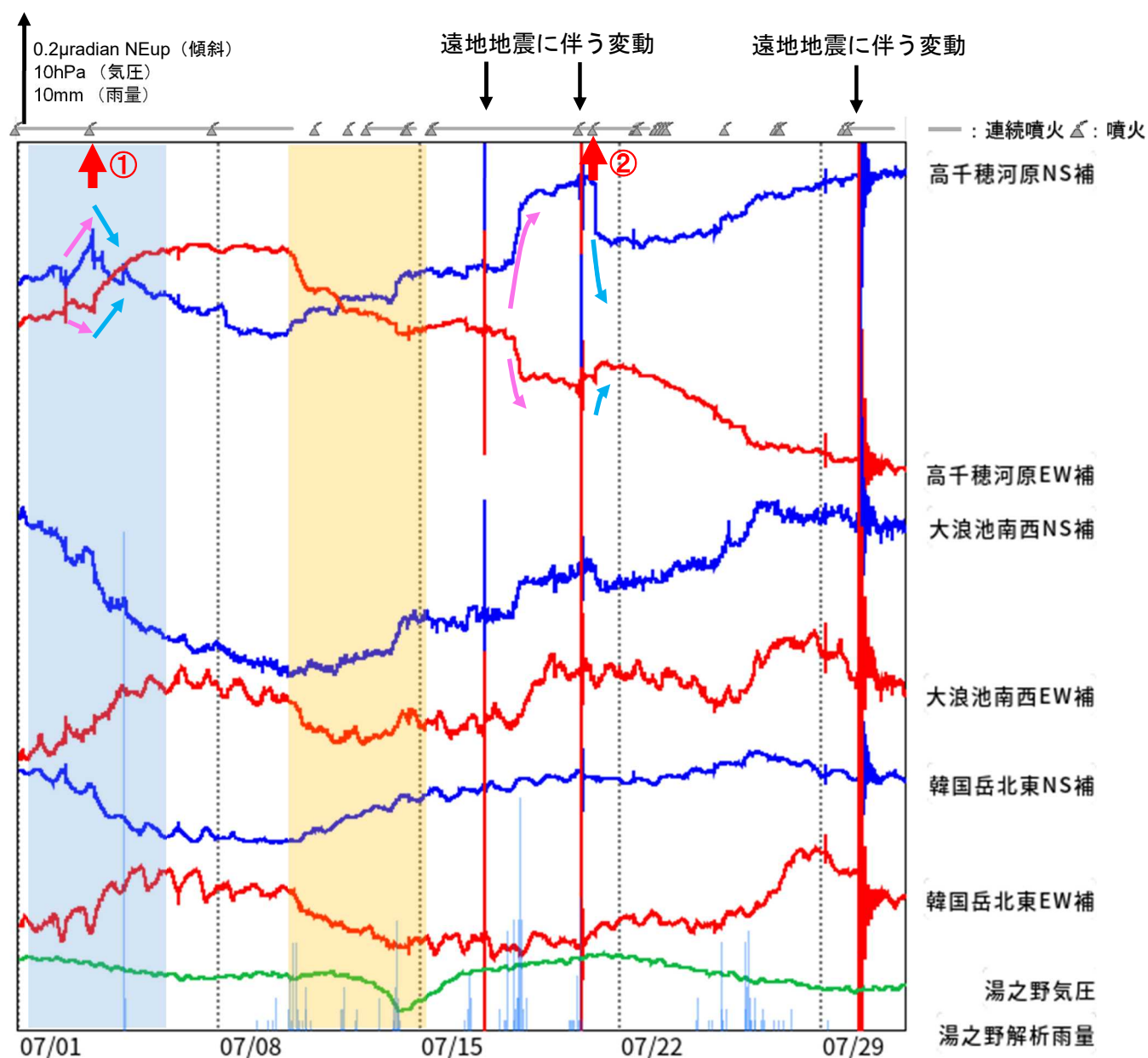


図 16 霧島山（新燃岳） 傾斜計による地殻変動の状況（分値）（7月1日～7月31日）

新燃岳近傍の傾斜計では、新燃岳付近の膨張（桃矢印）と噴火に伴う収縮（水色矢印）を示すと考えられる傾斜変動が時々みられました。また、新燃岳周辺の傾斜計では、7月上旬に新燃岳の北西側が変動源の可能性がある北西下がりの変動、中旬に北西上がりの傾斜変動（それぞれ青塗り部分、橙塗り部分）が認められました。赤矢印①は、噴煙が火口縁上5,000mまで上がった3日13時49分の噴火を、赤矢印②は、噴煙が火口縁上1,400m以上に上がった21日03時52分頃の噴火を示します。なお、まとまった降水の際には、傾斜変動にその影響が含まれていると考えられます。

各観測点の成分名に付記された「補」の文字は、そのデータが潮汐補正済みであることを示しています。

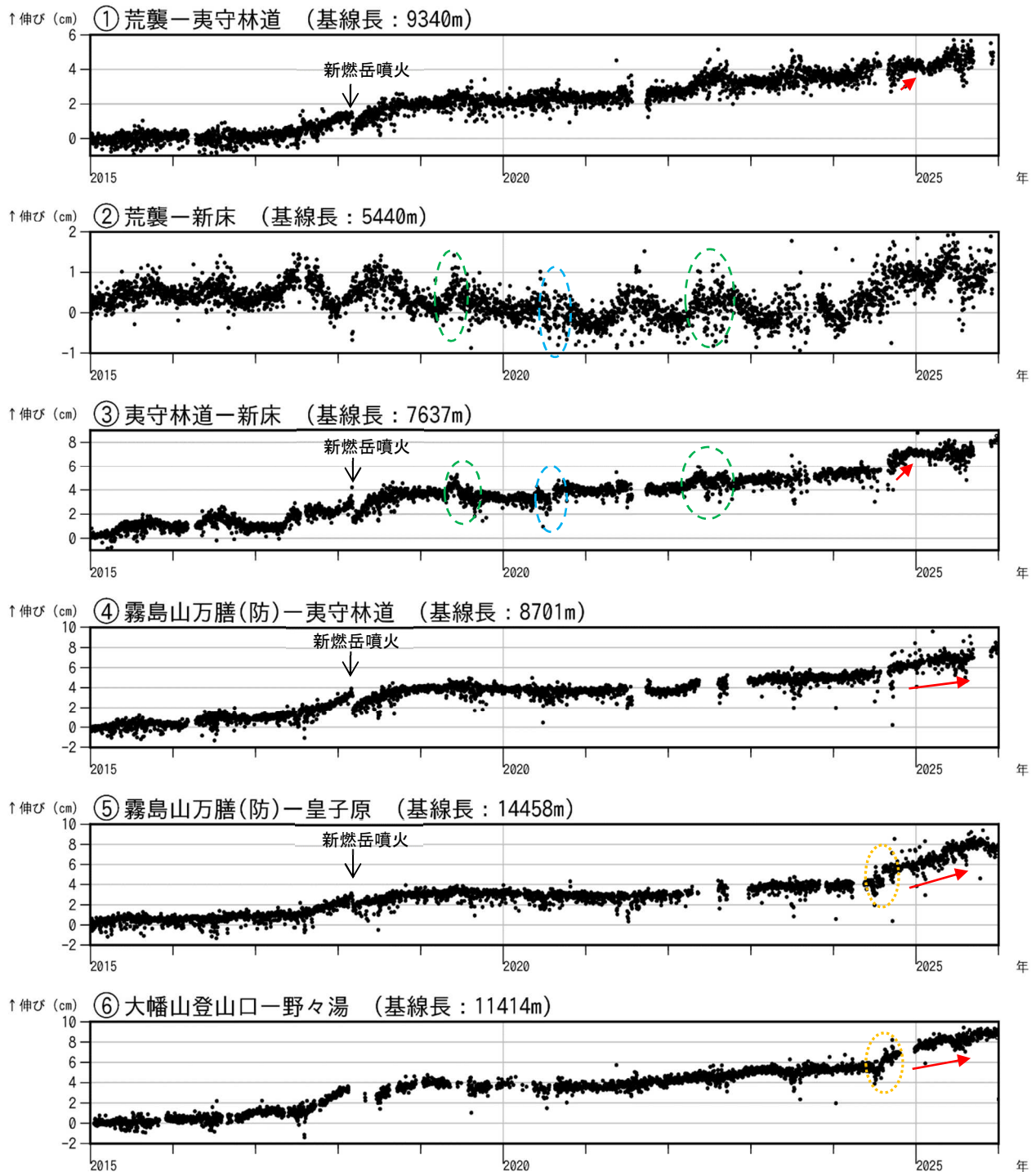


図 17 霧島山（新燃岳） GNSS 連続観測による基線長変化（2015 年 1 月～2025 年 12 月）

GNSS 連続観測では、2024 年 11 月頃から新燃岳付近の地下における膨張を示すと考えられる基線のわずかな伸びが認められましたが（赤矢印）、2025 年 7 月以降は認められません。なお、④～⑥の基線については、霧島山の深い場所での膨張によるとみられる変動の影響を受けている可能性があります。

これらの基線は図 18 の①～⑥に対応しています。

緑色破線内の変化は、新床観測点周囲の環境の変化に伴う影響と考えられます。

水色破線内の変化は、新床観測点のセンサー台交換による局所的な変動による影響と考えられます。

橙色破線内の変化は、2024 年 8 月 8 日の日向灘の地震による変動です。

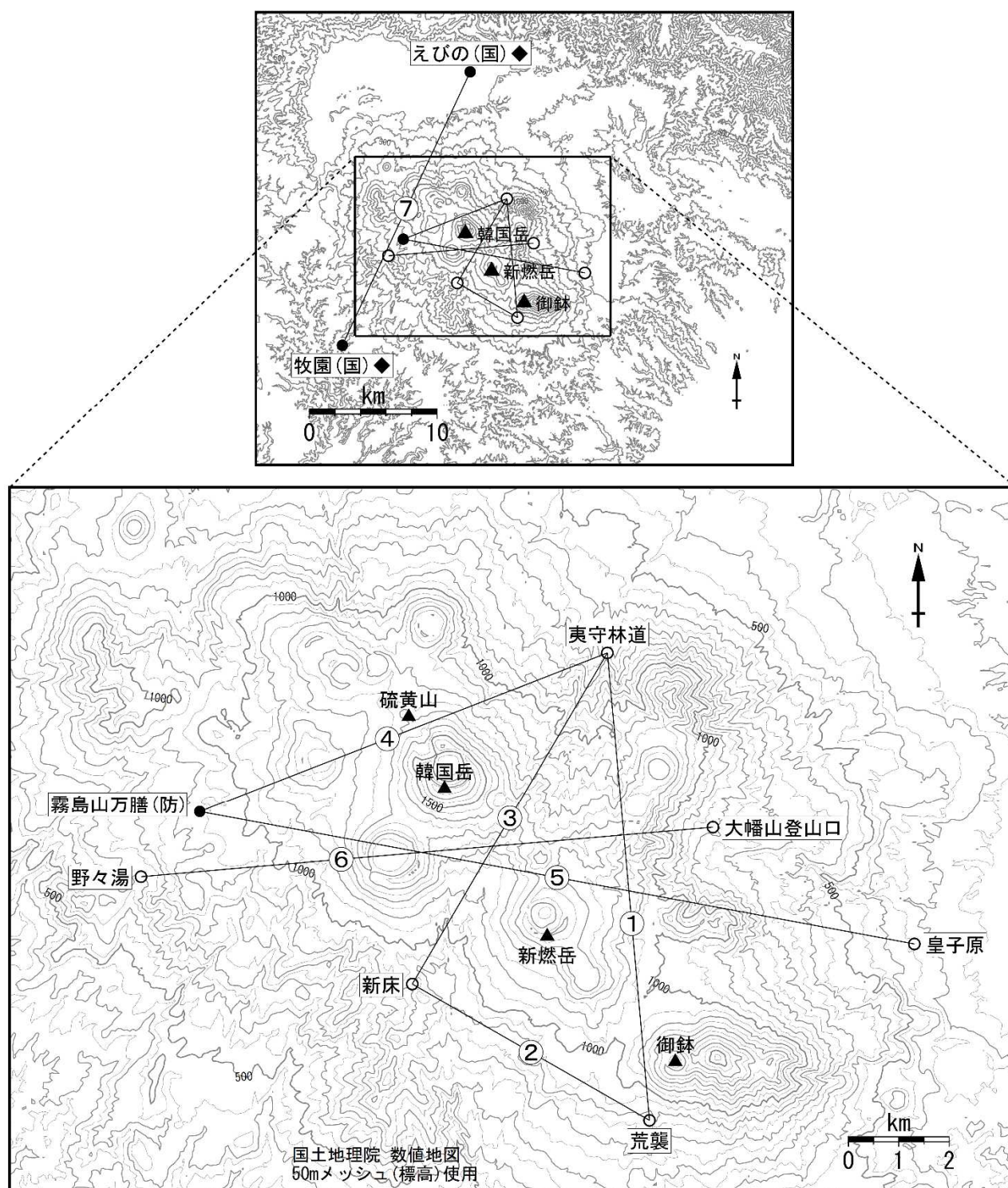


表1 霧島山（新燃岳） 主な噴火（2025年）

現象	噴火発生時刻 (年月日時分)	噴 煙				空振(Pa)		大きな 噴石 [m]	火 砕 流 [km]
		色	量	火口縁上の 高さ(m)	流向	湯之野	高千穂 河原		
噴火	2025/7/2 11:43	灰白	やや多量	2800	直上	0.3	0.2	－	－
噴火	2025/7/2 21:28	灰白	やや多量	2800	南西	0.4	0.3	－	－
噴火	2025/7/3 13:49	灰白	多量	5000	南	1.0	0.7	－	－
噴火	2025/7/4 16:40	灰白	やや多量以上	>3300	直上	0.4	不明	－	－
噴火	2025/8/10 5:23	灰白	多量以上	>3000	北東	1.2	3.1	不明	不明
噴火	2025/8/28 4:53	灰白	多量	5500	直上	2.5	1.9	－	－
噴火	2025/9/3 11:27	灰白	やや多量	2300	南西	1.8	0.8	－	－
噴火	2025/9/3 13:00	灰	やや多量	2300	南西	不明	0.5	－	－

火口縁上の噴煙の高さ2,000m以上を観測した噴火を掲載しています。なお、爆発は発生せず、弾道を描いて飛散する大きな噴石や火砕流を確認した噴火は観測されませんでした。「－」は観測なしを示しています。

御鉢

火山活動に特段の変化はなく、噴火の兆候は認められません。

○噴火警報・予報及び噴火警戒レベルの状況、2025 年の発表履歴

2025 年中変更なし	噴火警戒レベル 1（活火山であることに留意）
-------------	------------------------

○2025 年の活動概況

・噴煙などの表面現象の状況（図 1～4、図 5-①）

監視カメラによる観測では、火口縁を越える噴煙は認められませんでした。

2 月 13 日に実施した現地調査では、前回（2024 年 3 月 7 日）の観測と比較して、御鉢火口底付近、火口内壁南側や火口内壁西側の一部の地熱域の消失と縮小が認められました。

6 月 30 日に鹿児島県、12 月 12 日に陸上自衛隊第 8 飛行隊の協力により実施した上空からの観測では、御鉢火口内及びその周辺に噴気や日射の影響を超える地熱域は認められませんでした。

・地震や微動の発生状況（図 5-②～⑤、図 6）

火山性地震は少ない状態で経過しました。年回数は 5 回（2024 年：14 回）でした。

震源が求まった火山性地震は、御鉢火口付近の深さ約 2 km でした。

火山性微動は 2018 年 2 月 10 日以降、観測されていません。

・地殻変動の状況（図 7、図 8）

地殻変動観測では、火山活動によると考えられる特段の変化は認められませんでした。



図1 霧島山（御鉢） 御鉢の状況（12月25日、猪子石監視カメラ）

火口縁を越える噴煙は認められませんでした。

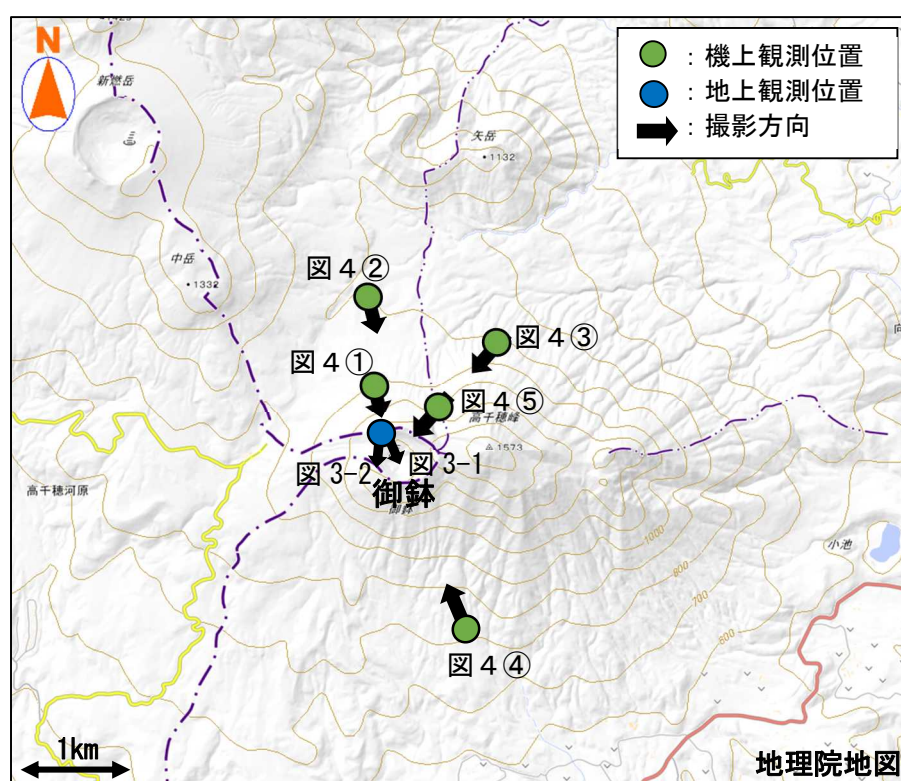


図2 霧島山（御鉢） 図3～4の観測位置と撮影方向

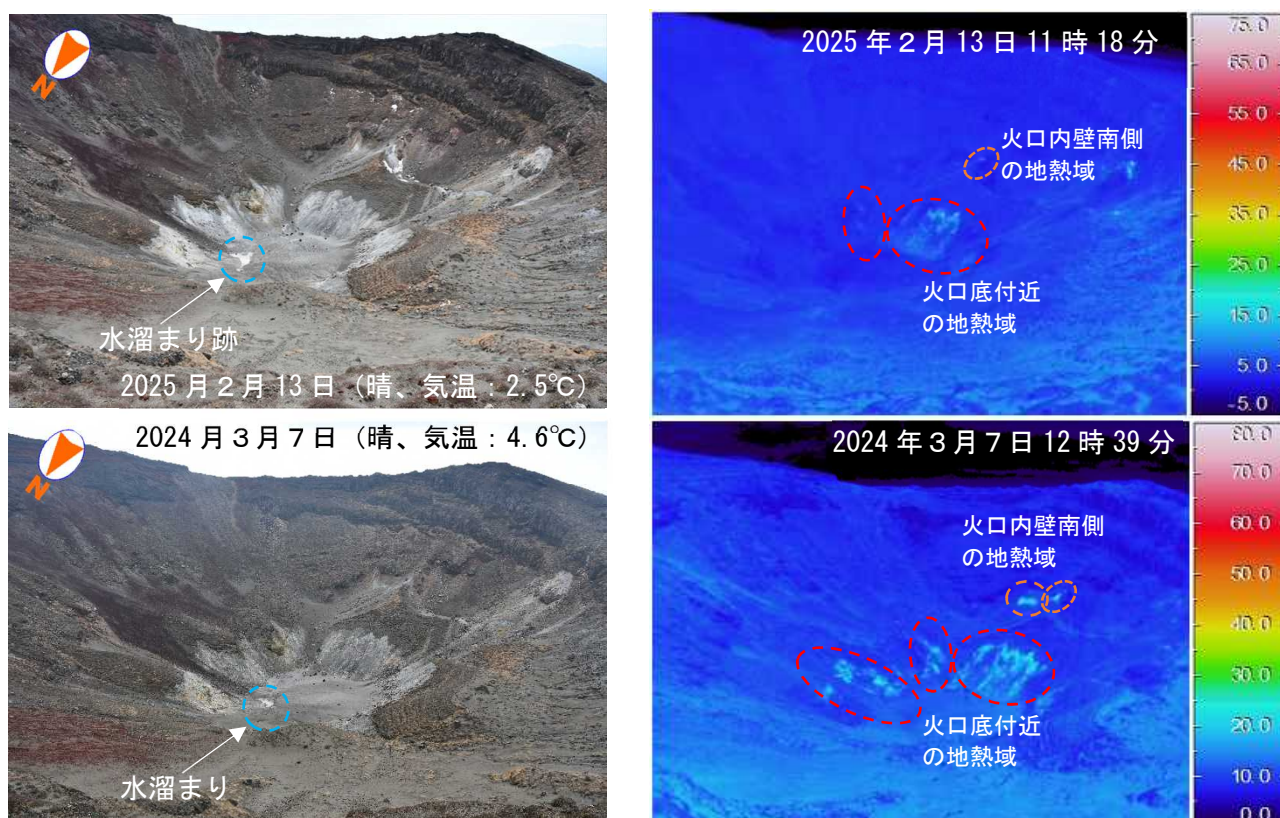


図3-1 霧島山（御鉢） 御鉢火口内の状況（火口縁北西側から観測）

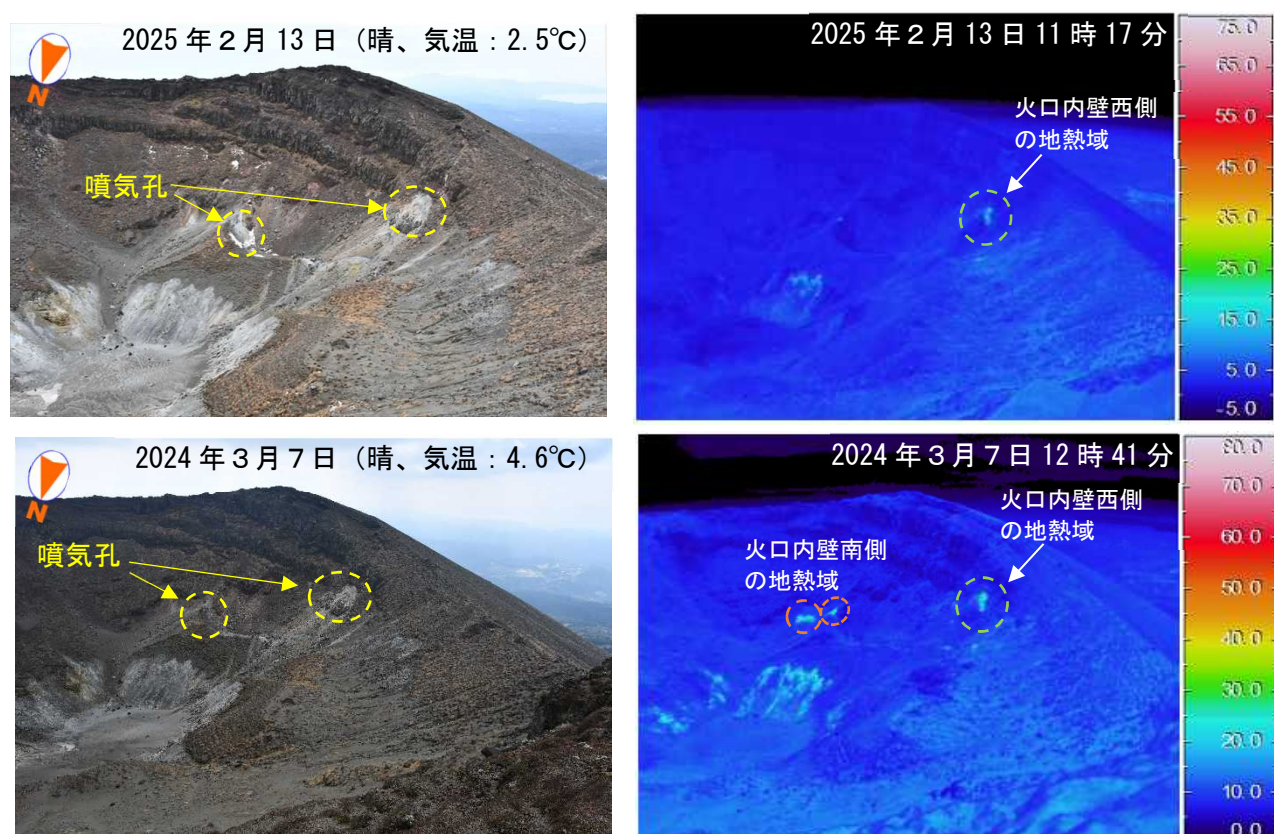


図3-2 霧島山（御鉢） 御鉢火口内の状況（火口縁北西側から観測）

御鉢火口底付近（赤破線内）、火口内壁南側（橙破線内）や火口内壁西側（緑破線内）で引き続き地熱域を確認しましたが、前回（2024年3月7日）の観測と比較して一部の地熱域の消失と縮小が認められました。また、火口内で噴気（黄破線内）は認められませんでした。前回の観測で確認された水溜まり（水色破線内）に水はたまっていませんでした。

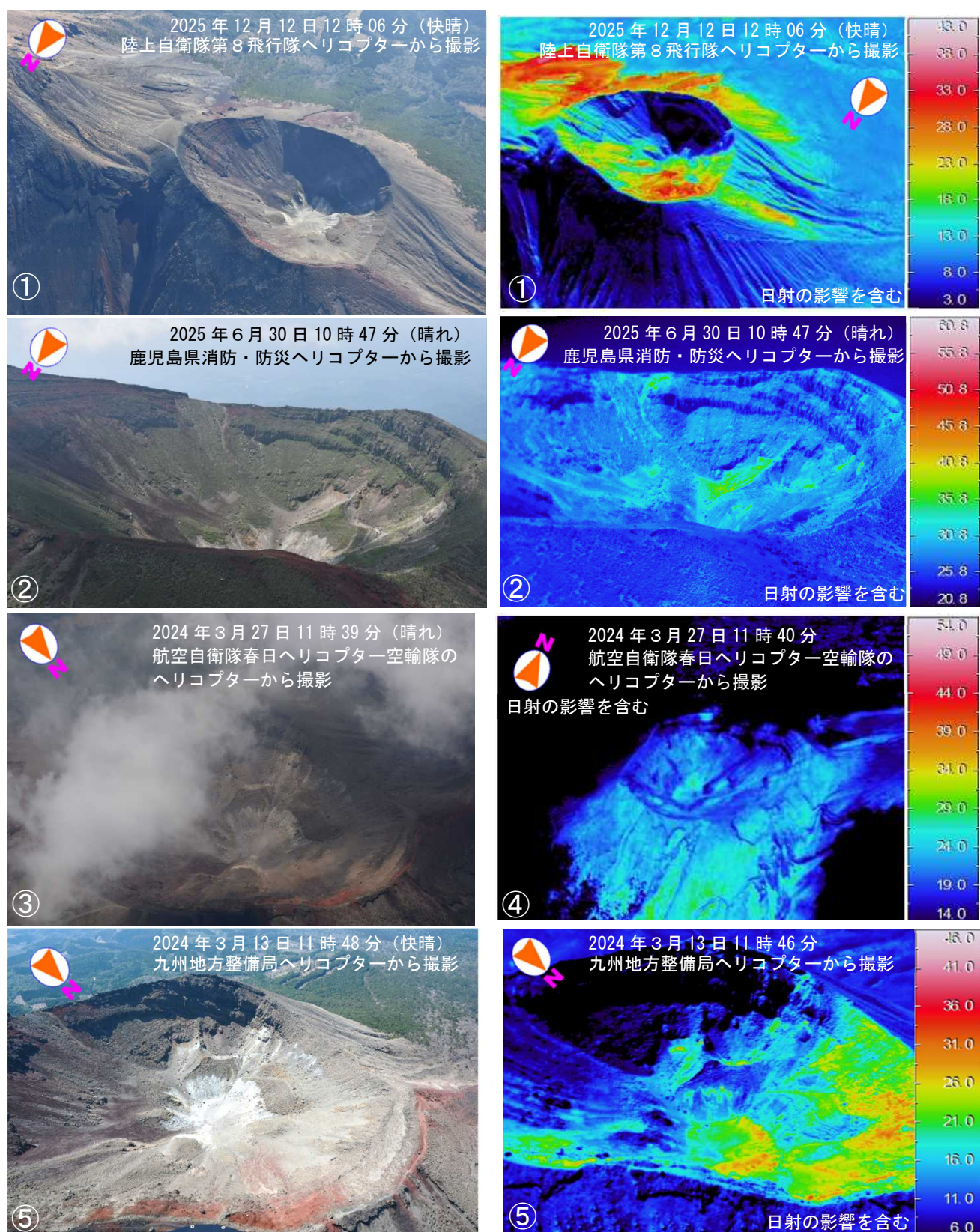


図4 霧島山（御鉢） 御鉢火口内及び火口周辺の状況（上空から観測）

御鉢火口内及びその周辺に噴気や日射の影響を超える地熱域は認められませんでした。

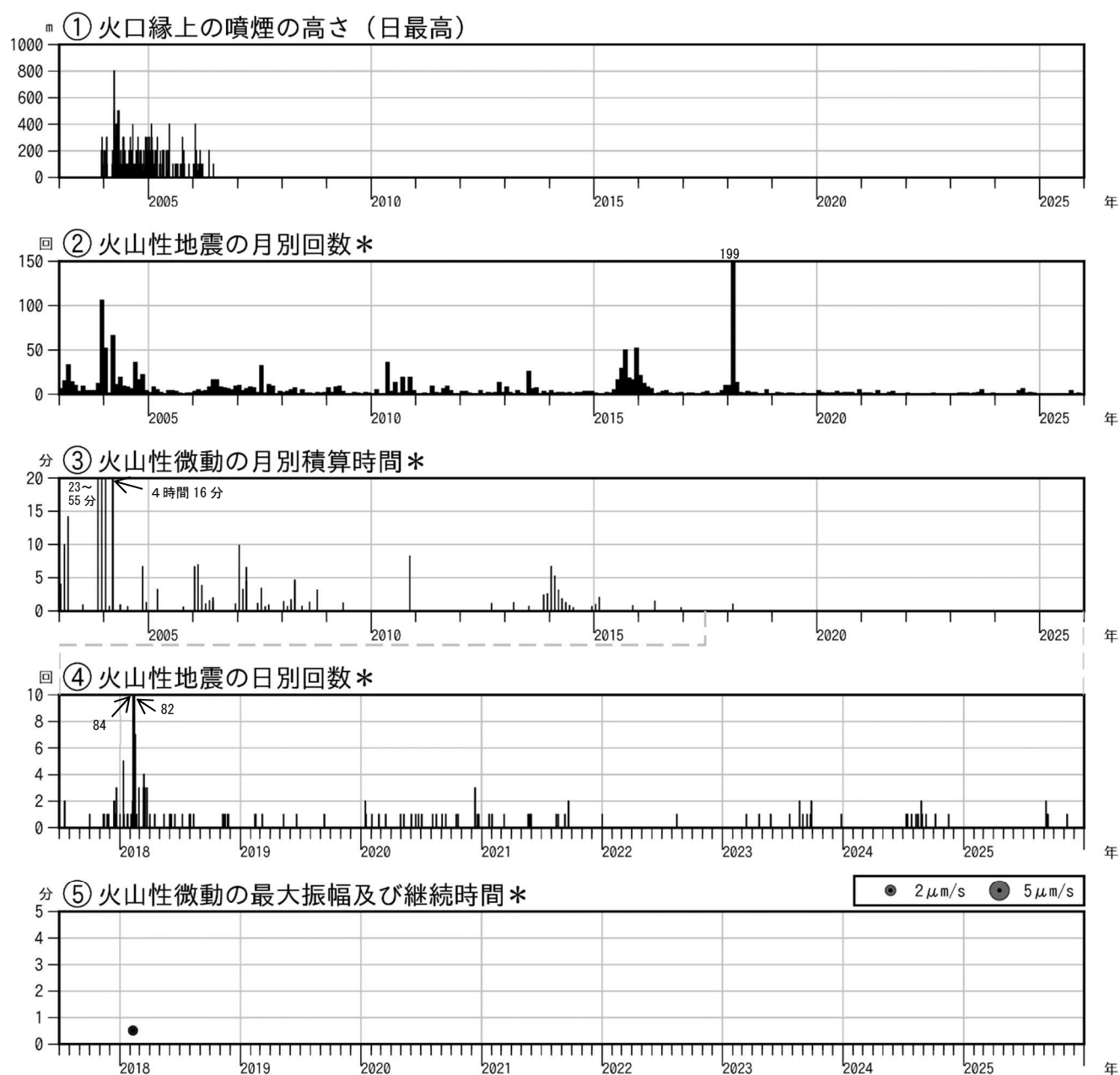


図5 霧島山（御鉢） 火山活動経過図（2003年1月～2025年12月）

<2025年の状況>

- ・火口縁を越える噴煙は認められませんでした。
- ・火山性地震は少ない状態で経過しました。年回数は5回でした（2024年：14回）。
- ・火山性微動は2018年2月10日以降、観測されていません。

＊「高千穂峰2観測点、高千穂西（震）観測点及び高千穂河原観測点」で計数

（計数基準 高千穂峰2：上下動 $2.0\mu\text{m/s}$ 以上、高千穂西（震）：水平動東西成分または上下動 $1.3\mu\text{m/s}$ 以上、高千穂河原：水平動南北成分または上下動 $1.0\mu\text{m/s}$ 以上）

2022年8月21日から11月17日まで、及び2023年8月24日以降、高千穂峰2観測点は障害のため、高千穂河原観測点で計数しています。

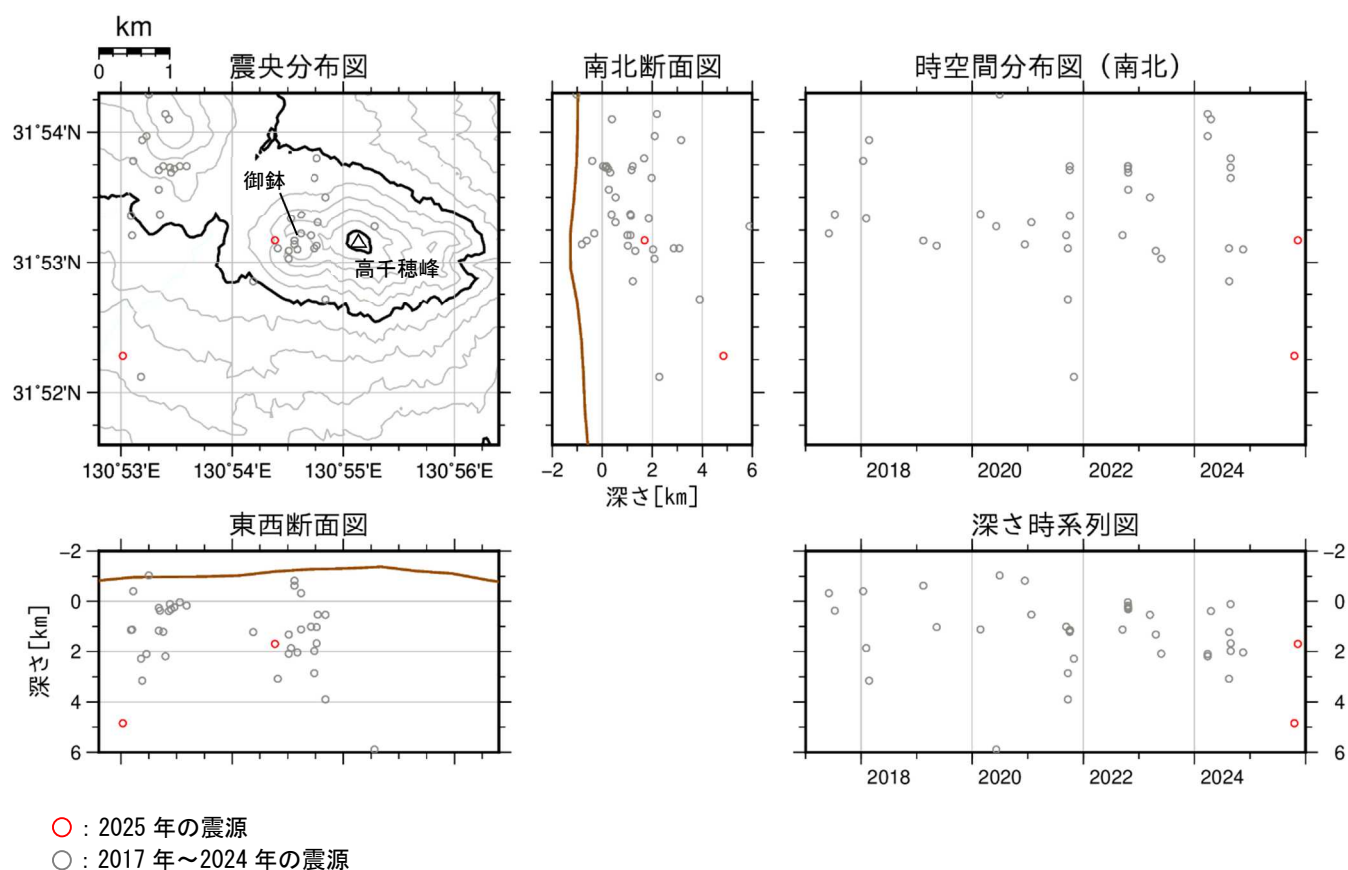


図6 霧島山（御鉢） 火山性地震の震源分布図（2017年～2025年）

<2025年の状況>

震源が求まった火山性地震は、御鉢火口付近の深さ約2kmでした。

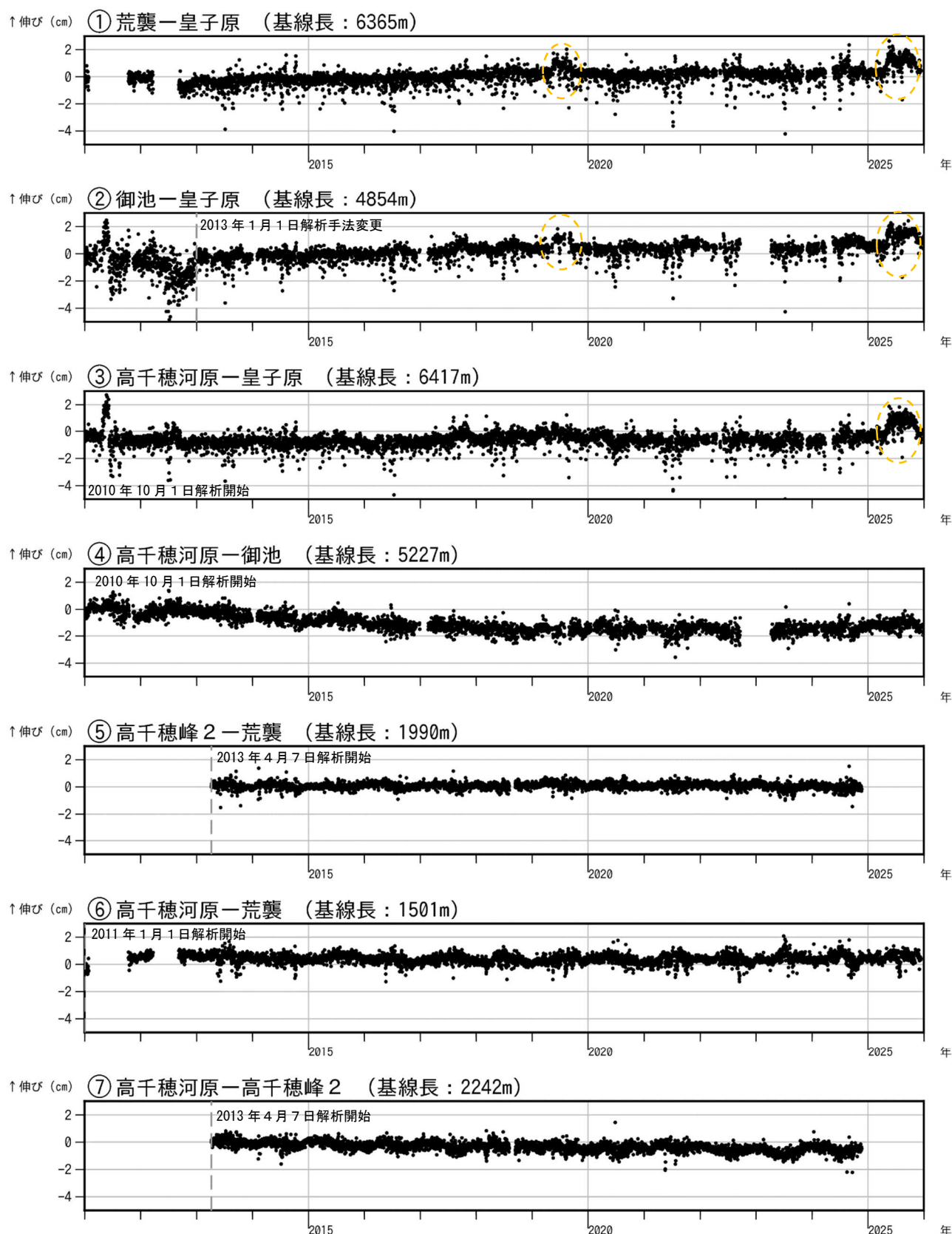


図7 霧島山(御鉢) GNSS連続観測による基線長変化(2011年1月～2025年12月)

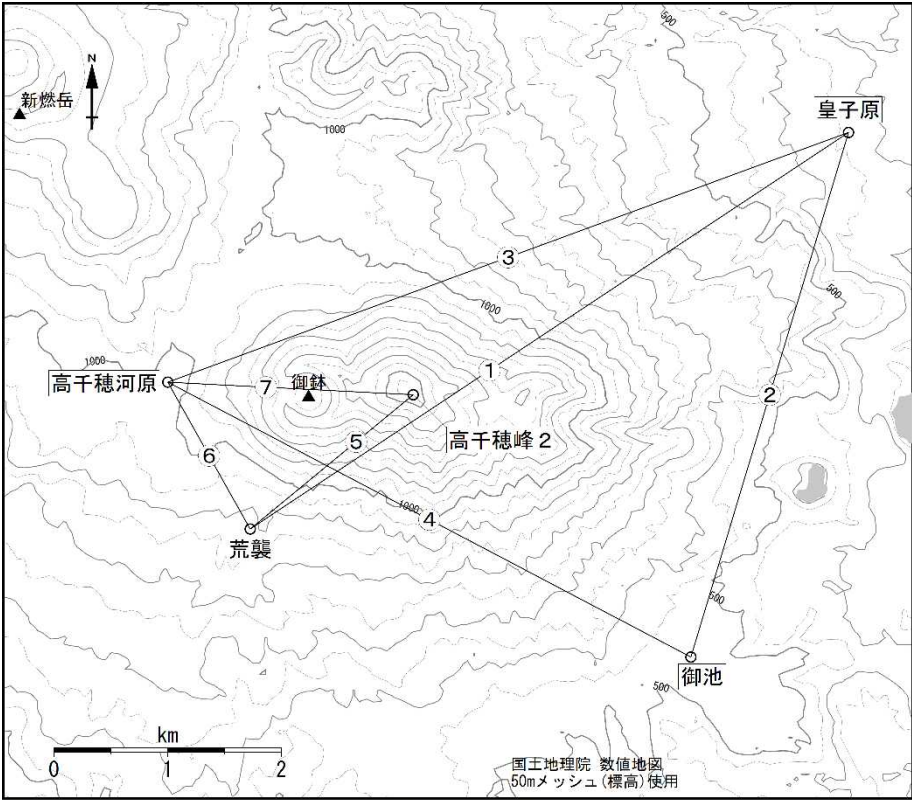
火山活動によると考えられる変化は認められませんでした。

これらの基線は図8の①～⑦に対応しています。

基線の空白部分は欠側を示しています。

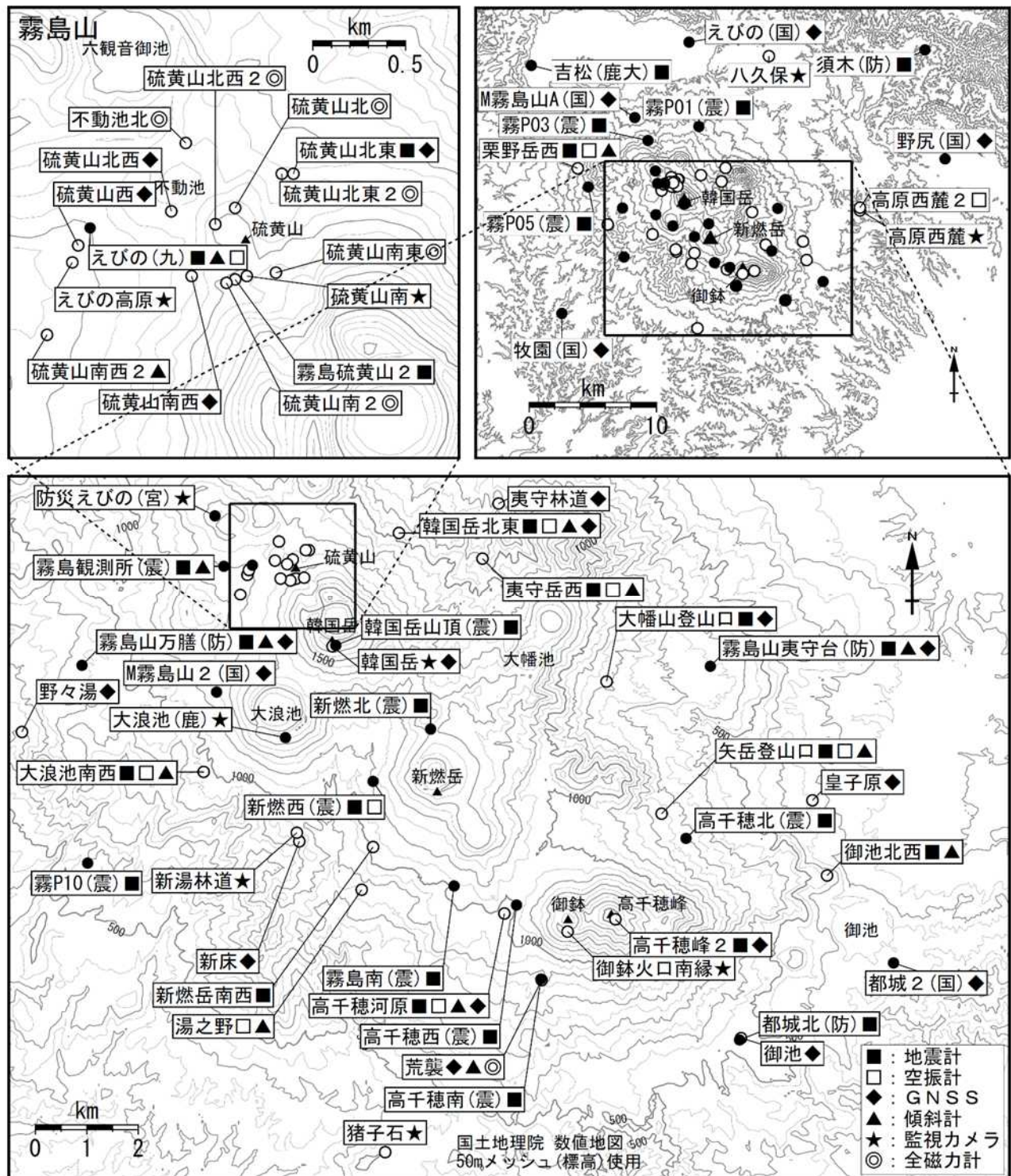
2010年10月及び2013年1月に、解析方法を変更しています。

橙色の破線内の変化は、皇子原観測点周囲の環境の変化に伴う影響と考えられます。



小さな白丸(○)は気象庁、小さな黒丸(●)は気象庁以外の機関の観測点位置を示しています。
(国)：国土地理院

図8 霧島山(御鉢) GNSS 連続観測点と基線番号



霧島山 気象庁（火山）観測点一覧（緯度・経度は世界測地系）

測器種類	地点名	位置			設置 高 (m)	観測開始 年月	備考
		緯度	経度	標高 (m)			
地震計	新燃岳南西	31° 53.89′	130° 52.20′	1,035	0	1964.7.1	
	高千穂河原	31° 53.19′	130° 53.82′	972	-98	2010.8.2	
	矢岳登山口	31° 54.24′	130° 55.76′	762	-1	2011.4.1	臨時観測点
	夷守岳西	31° 56.93′	130° 53.55′	882	-1	2011.3.1	臨時観測点
	栗野岳西	31° 57.49′	130° 46.37′	640	-1	2011.3.1	臨時観測点
	韓国岳北東	31° 57.20′	130° 52.52′	965	-95	2013.3.11	
	大浪池南西	31° 54.68′	130° 50.11′	981	-93	2013.3.11	
	大幡山登山口	31° 55.63′	130° 55.08′	819	-1	2013.3.11	
	高千穂峰2	31° 53.13′	130° 55.19′	1,538	-1	2013.3.20	
	御池北西	31° 53.59′	130° 57.80′	485	-1	2013.3.11	
	霧島硫黄山2	31° 56.71′	130° 51.21′	1,305	-1	2016.4.8	臨時観測点
	硫黄山北東	31° 57.02′	130° 51.41′	1,218	-2	2016.12.1	広帯域地震計
空振計	湯之野	31° 53.44′	130° 52.06′	887	1	1999.3.1	
	高千穂河原	31° 53.19′	130° 53.82′	972	2	2010.8.2	
	矢岳登山口	31° 54.24′	130° 55.76′	762	2	2011.4.1	
	夷守岳西	31° 56.93′	130° 53.55′	882	2	2011.3.1	臨時観測点
	栗野岳西	31° 57.49′	130° 46.37′	640	2	2011.3.1	臨時観測点
	韓国岳北東	31° 57.20′	130° 52.52′	965	2	2013.3.11	
	大浪池南西	31° 54.68′	130° 50.11′	981	2	2013.3.11	
	高原西麓2	31° 55.82′	131° 00.46′	212	2	2013.3.22	
GNSS	御池	31° 51.88′	130° 56.74′	526	2	2001.3.1	
	新床	31° 54.95′	130° 51.29′	938	2	2001.3.1	
	皇子原	31° 54.38′	130° 57.62′	335	2	2001.3.1	
	夷守林道	31° 57.51′	130° 53.75′	766	3	2003.4.1	臨時観測点
	高千穂河原	31° 53.19′	130° 53.82′	972	2	2010.10.1	
	野々湯	31° 55.10′	130° 47.87′	702	3	2011.3.30	臨時観測点
	荒襲	31° 52.49′	130° 54.28′	877	2	2003.3.22	
	韓国岳	31° 56.00′	130° 51.70′	1,669	1	2013.3.22	
	韓国岳北東	31° 57.20′	130° 52.52′	965	3	2013.3.8	
	高千穂峰2	31° 53.13′	130° 55.19′	1,538	1	2013.4.8	
	大幡山登山口	31° 55.63′	130° 55.08′	819	3	2013.3.23	
	硫黄山北西	31° 56.91′	130° 50.99′	1,252	2	2017.8.24	臨時観測点
	硫黄山南西	31° 56.72′	130° 51.06′	1,256	2	2017.8.24	臨時観測点

	硫黄山北東	31° 57.02′	130° 51.41′	1,218	2	2017.9.14	臨時観測点
	硫黄山西	31° 56.81′	130° 50.67′	1,193	1	2018.7.11	臨時観測点
傾斜計	高千穂河原	31° 53.19′	130° 53.82′	972	-98	2011.4.1	
	湯之野	31° 53.44′	130° 52.06′	887	-30	2003.4.1	
	荒襲	31° 52.49′	130° 54.28′	877	-30	2003.4.1	
	矢岳登山口	31° 54.24′	130° 55.76′	762	-20	2011.4.1	臨時観測点
	夷守岳西	31° 56.93′	130° 53.55′	882	-20	2011.3.1	臨時観測点
	栗野岳西	31° 57.49′	130° 46.37′	640	-20	2011.3.1	臨時観測点
	韓国岳北東	31° 57.20′	130° 52.52′	965	-95	2013.3.25	
	大浪池南西	31° 54.68′	130° 50.11′	981	-93	2013.3.27	
	御池北西	31° 53.59′	130° 57.80′	485	-30	2013.3.25	
	硫黄山南西2	31° 56.55′	130° 50.56′	1,181	-15	2023.5.26	
監視カメラ	猪子石	31° 50.68′	130° 52.35′	485	40	1994.2.1	
	えびの高原	31° 56.76′	130° 50.65′	1,189	6	2014.11.26	臨時観測点
	御鉢火口南縁	31° 53.00′	130° 54.60′	1,327	1	2010.4.1	
	新湯林道	31° 54.04′	130° 51.26′	934	1	2018.3.15	臨時観測点
	高原西麓	31° 55.70′	131° 00.46′	211	16	2011.3.1	臨時観測点
	八久保	32° 02.26′	130° 55.92′	374	6	2011.3.1	臨時観測点 可視及び熱映像カメラ
	韓国岳	31° 56.00′	130° 51.70′	1,669	1	2011.10.1	可視及び熱映像カメラ
	硫黄山南	31° 56.72′	130° 51.25′	1,313	2	2016.12.1	可視及び熱映像カメラ
磁力計	不動池北	31° 57.11′	130° 51.04′	1,243	2	2016.1.1	
	硫黄山北東2	31° 57.02′	130° 51.37′	1,223	2	2016.1.1	
	硫黄山北	31° 56.92′	130° 51.21′	1,293	2	2016.1.1	
	硫黄山南2	31° 56.70′	130° 51.18′	1,310	2	2016.1.1	
	硫黄山南東	31° 56.73′	130° 51.35′	1,323	2	2016.1.1	
	荒襲	31° 52.47′	130° 54.26′	877	2	2016.1.1	
	硫黄山北西2	31° 56.87′	130° 51.14′	1304	2	2025.3.7	